# 学部・研究科等の現況調査表

研 究

平成28年6月 奈良女子大学

# 目 次

1.	又	字	部		1-1
2.	理	学	部		2-1
3.	生活	環境:	学部		3-1
4.	人間之	文化研?	究科		4 – 1

# 1. 文 学 部

Ι	文学部の研究目的と特徴・・・	•	•	•	•	•	1 - 2
П	「研究の水準」の分析・判定	•	•	•	•	•	1 – 3
	分析項目 I 研究活動の状況	•	•	•	•	•	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	•	•	•	•	•	1 – 8
Ш	「質の向上度」の分析・・・・	•	•	•	•	•	1 - 9

## I 文学部の研究目的と特徴

#### 1 研究目的

文学部では、学部と学科の研究目的を資料Ⅰ-1、Ⅰ-2のように定めている。

#### (資料 I-1:学部の研究目的)

文学部の研究目的は、本学の基本理念に基づき、人間性への深い洞察に根ざした人文社会科学的な知をもって、人間及びそれを取り巻く世界にかかわる諸問題の研究を学際的・総合的に推進することにある。高度な基礎研究及び応用研究の進展を図り、研究成果を社会に積極的に発信するとともに、地域社会のニーズを踏まえた研究や国際的に貢献できる研究に取り組む。

## (資料 I-2:学科の研究目的)

人文社会学科は、歴史学・社会学・地理学を主たる研究領域とし、日本の古代文化発祥の地である奈良をはじめとして、日本や世界の歴史・社会・文化・地域の特徴を国際比較の観点から学際的・総合的に研究する。

言語文化学科では、言語学・国語国文学・中国語中国文学・英語英米文学・フランス語フランス文学・ドイツ語ドイツ文学を主たる研究領域とし、言語文化の個別的なあり様とともに、その普遍的な言語文化の構造・特質・情報機能を学際的・総合的に研究する。

人間科学科は、教育学・哲学・倫理学・音楽・心理学を主たる研究領域とし、人間 形成の諸問題、人間の諸行動、身体の諸問題について学際的・総合的に研究する。

以上、文学部ウェブページより

以上は、第2期中期目標において本学が掲げている「国際的水準の個性的、独創的な基礎研究や応用研究」に加えて「分野横断的な研究」すなわち学際的な研究を展開すること、さらに「地域に開かれた大学として社会連携を推進するとともに、アジア諸国を中心とした国際交流を推進する」ことに沿うものである。

#### 2 特徴

① 学部の学際プロジェクト研究

学部教育と一体になった学際研究プロジェクトとして、現在「なら学」、「ジェンダー言語文化学」、「差異と交感の人間学」を推進している。

② センターとの協力体制に基づく研究

文学部教員は古代学学術研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センター、教育システム研究開発センター、国際交流センター、社会連携センター、共生科学研究センターの委員、運営委員、センター長などを兼任しつつ、研究を推進している。

③ 外部資金による学際研究

日本学術振興会の受託研究のほか、JST (国立研究開発法人「科学技術振興機構」)地域開発事業などの大型のプロジェクトに取り組んでいる。

④ 質の高い学術誌とまほろば叢書の刊行

文学部では紀要に相当する『文学部研究教育年報』(年1回)の刊行のほかに、複数のコースが独自の学会組織を有し、学術誌を発行している。また、文学部の研究を一般社会に発信するため「まほろば叢書」を刊行している。

## [想定する関係者とその期待]

文学部における研究活動は、広範な分野を対象としており、学部の研究目的に沿った個性的、独創的な基礎研究や応用研究、学際的な研究、アジア諸国を中心とした国際交流などの推進が期待されている。また、地域社会からは奈良や現代社会の諸課題に関する有益な研究の推進が期待されている。

# Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

## (観点に係る状況)

# ① 研究実施状況

## A. 学部プロジェクト

文学部では各学科を母体に共同で推進する研究・教育プロジェクトとして、次の3つの学際的研究を推進しており、『文学部研究教育年報』で特集を組んで、成果を公表している。

○「なら学」=学際的研究、地域をテーマとする共同研究

人文社会学科を中心とする、歴史ある奈良の社会や文化の特性を現代的視点から読み解く研究で、「なら学談話会」や「なら学研究会」等を開催している(別添資料 II - I - 1)。また、成果の一部は「続・大学的奈良ガイド」『月刊奈良』(社団法人現代奈良協会)、「続・続・大学的奈良ガイド」『月刊大和路ならら』(地域情報ネットワーク株式会社)としても発信されている。

○「ジェンダー言語文化学」=学際的研究、国際連携

言語文化学科の教員を中心とする、言語と文学に関するジェンダー研究で、シンポジウムや講演会等を開催している(別添資料  $\Pi$  - I - 2)。年 1 回、ニュースレターを発行しているほか、平成 26 年度には、成果を授業に活用するため、プロジェクト教員が共同執筆でテキスト『恋をする、とはどういうことか?—ジェンダーから考えることばと文学』(ひつじ書房 2014)を作成した(別添資料  $\Pi$  - I - 3)。

○「差異と交感の人間学」=学際的研究、社会課題

人間科学科の教員が中心となり、「まなざし」をめぐる諸問題を念頭に置きながら、人間存在とその諸次元について種々の研究を開催している(別添資料 II - I - 4)。

#### B. 受託研究による学際研究

外部資金を得た学際研究としては、以下の2つがある。

〇平成21年度日本学術振興会「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の受託研究「文化財に含まれる膠の自然科学的分析による古代文化史および技術史の解明」(平成21~25年度)。

古代の動物性遺物について、動物考古学とプロテオミクスの視点からタンパク質質量分析の手法を用いて分析するもので、文学部の教員 4 名と理学部の教員が参画した。最終評価で A を得た(参照:http://www.jsps.go.jp/j-ibunya/saisyu-hyouka.html)(別添資料  $\Pi$ -I-5)。

○平成 23 年度 JST (国立研究開発法人「科学技術振興機構」) 戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 採択事業「高齢者の営農を考える「らくらく農法」の開発」

高齢営農コミュニティという共通テーマに、文学部の教員 6 名が農学・工学(機器開発)・スポーツ科学・社会学といった様々な分野から取り組んだ事業。事業対象地区である吉野郡下市町と本学は平成 26 年度に包括的連携に関する協定を締結。平成 27 年度設置の「やまと共創郷育センター」の構想に寄与した。事後評価では「総合的に見て、十分な成果が得られた」と高く評価されている(参照:https://www.ristex.jp/examin/korei/program/pdf/H26houkoku\_fin.pdf)(別添資料  $\Pi$  – I – 6)。

## C. センターと連携した文学部の共同研究

文学部教員は本学のセンターの古代学学術研究センター、教育システム研究開発センター、共生科学研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センターの運営委員やセンター長などを兼任しつつ共同研究に取り組んでいる。

#### D. 国際研究交流

国際研究交流は盛んであるが、海外渡航が多いのに対して、海外研究者の受け入れがやや伸び悩んでいる(別添資料 II-I-7)。

## E. その他の研究活動と結びついた地域貢献事業

奈良県教育委員会や元興寺文化財研究所と連携し、奈良地域の社寺等が所蔵する貴重な文化財をデジタル画像にしてインターネットで公開する「古代奈良を中心とした歴史的文化遺産のデータ化」事業や、研究者の研究の知見を活かした「健康なら 21Step アップ事業」、「次世代自立支援の子ども学」を推進している。

## ② 研究成果の発表状況

#### A. 研究成果の状況

文学部教員は、第2期の期間中、一人当たり年平均で論文を1.3本、著書0.8冊を公刊し(資料 $\Pi$ -I-8、9)、学会発表(国内外を含む)を1件以上行っている(資料 $\Pi$ -I-10)。 学会や研究会の主催件数も増加しており(資料 $\Pi$ -I-11、12)、研究成果の発表状況は良好な水準にある。

(資料Ⅱ-I-8:論文等発表数)

*	うち	単著は	(	内に表示

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
査読有り論文(本)	13(11)	14(9)	18(14)	27(19)	11(8)	19(15)	102(76)
依頼論文(本)	10(10)	9(9)	9(8)	6(6)	7(7)	13(13)	54(53)
査読無し論文(本)	30(28)	26(22)	33(29)	25(20)	33(26)	31 (29)	178(154)
その他(解説・書評等)	21(21)	35(35)	20(20)	17(17)	36(36)	23(23)	152(152)
合計論文数(本)	74(70)	84(75)	80(71)	75(62)	87(77)	86(80)	486 (432)
一人当たり平均(本)	1.23	1.5	1.07	1.07	1.45	1.45	1.3本

## (資料Ⅱ-Ⅰ-9:著書(編著含む)数の推移)

*	うち	単著は	(	内に表示
---	----	-----	---	------

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
合計冊数	39(5)	35(2)	57(4)	71(7)	55(5)	38(3)	295(26)
一人当たり平均(冊)	0.65	0.62	0.83	1.01	0.91	0.64	0.79冊

#### (資料 II - I -10: 学会発表件数)

## \*うち共同発表は〔〕内に表示

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
国際学会(件)	8	10	26	29	24	22	119
国内学会(件)	33(5)	39[2]	50(6)	44[7]	57(2)	45[1]	268[23]
合計	41(5)	49[2]	66[6]	73[7]	81(2)	67[1]	387[23]
一人当たり平均(件)	0.68	0.88	0.97	1.04	1.35	1.13	1.03件

## (資料 II - I -11: 学会・シンポジウムの主催件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
開催件数	9	10	7	11	8	12	57
一人当たり平均(件)	0.15	0.17	0.1	0.15	0.13	0.2	0.15件

(資料Ⅱ-I-12:研究会の主催件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	のべ数
教員全体数(名)	60	56	68	70	60	59	373名
開催件数	31	36	44	59	61	81	312
一人当たり平均(件)	0.51	0.64	0.64	0.84	1.01	1.37	0.83件

#### B. 社会的還元

### ○地域への還元

年に2回の公開講座のほか、前掲の『月刊奈良』(社団法人現代奈良協会)、『月刊大和路ならら』(地域情報ネットワーク株式会社)への連載や新聞などへの寄稿を通して地域に研究成果を還元している。「高齢者の営農を考える「らくらく農法」の開発」では対象地の農事組合法人や下市町地域づくり推進課の設立に影響を及ぼし、下市町がプラチナ大賞優秀賞を受賞する栄誉に寄与した。こうした文学部の活動はメディアを通じても発信されている(別添資料  $\Pi$  – I – I – I – I )。

#### ○学術界への還元

文学部の教員は、各学術団体の委員や理事を務めることで学術界に貢献しているほか、ほぼ3分の1が学術誌の編集委員を務めており、半数以上が学術誌の査読を委嘱されている(資料 $\Pi$ -I-14、15)。

#### (資料 II - I -14: 学術雑誌の編集委員)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59
学術誌の編集委員数	18	19	23	23	17	23

#### (資料 II - I -15: 論文査読件数)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59
査読件数	28	29	40	24	31	37

#### ③ 研究資金獲得状況

資料 II-I-16 のように、科学研究費の採択額は、各年度総額 3,000~ 4,500 万円前後、第 2 期を通した総額は 2 億 2 千 940 万円で、文学部教員の科学研究費の保有率は 54%である。平成 26 年度までの委託研究は主に、平成 22-25 年度の日本学術振興会(異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業)と平成 24-26 年度の科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)で、各年度総額は 3,700~6,200 万円前後で、これらすべてを合わせた第 2 期の外部資金総額は 2 億 8 千 810 万円となっている。

また、平成 27 年度の科学研究費配分で、細目別過去 5 年の新規採択の累計数の上位 10機関には各国文学、日本文学、英語学が 10 位に、中国文学と人文地理学が 4 位に本学の人文系がランクインしている (別添資料 II - I -17)。

(資料 II - I -16:平成 22~27 年度の外部資金獲得状況) 専任教員

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
専任教員数(名)	60	56	68	70	60	59	のべ373名
<b>科学研究費</b> (新規+継続件数)	28	32	39	42	33	27	のべ201件
保有(新規+継続)率	46.7%	57.1%	57.3%	60.0%	55.0%	45.8%	平均保有率54%
科学研究費総額(千円)	36,000	44,400	44,700	41,600	32,200	30,500	229,400
その他の外部資金受入件数	3	4	5	4	2	1	のべ19件
委託研究・受託研究(千円)	3,630	16,950	11,550	11,080	3,320	0	46,530
共同研究	0	0	0	0	0	150	150
寄附金(千円)	800	580	1,020	980	750	0	4,130
外部資金の総額(千円)	40,430	61,930	57,270	53,660	36,270	30,650	280,210

#### 専任教員以外

名誉教授科研費獲得件数	3	2	1	0	0	0	のべ6件
PD研究員科研費獲得件数	2	2	1	1	0	0	のべ6件
総額(千円)	9,900	3,800	1,600	600	0	0	15,900

## ④研究推進方策とその効果に関する例

#### ○基盤的資金等の配分

上記の学部の3プロジェクトについては、文学部長裁量経費から毎年一定額を配分し、研究支援を行っている。その効果として(別添資料II-I-1、2、4)のように研究会や講演会活動が活発に開催されている。

#### ○情報発信

年1回刊行の『文学部研究教育年報』のほか、各学科や専門分野を同じくする研究者が運営する学会が刊行している学術出版物が8誌ある(資料 II-I-18: 文学部学術刊行物出版状況)。さらに、23年度に研究や教育の成果を社会に発信するために「まほろば叢書」を創刊し、27年度までに計7冊を公刊した(資料 II-I-19、20)。

#### ○その他

平成 25 年度に「人文科学系サバティカル実施細則」を制定し、これまでに女性教員 2 名がこの制度を利用して昇任につながるような研究を行った。また、学部内の教員同士が研究を報告しあう研究交流集会を年に複数回開催することで研究を推進している(別添資料  $\Pi$  – I – I – I – I – I )。

(資料Ⅱ-Ⅰ-18:文学部学術刊行物出版状況)

誌名	発行者	関連するコース	第2期での刊行	状況	備考
『奈良女子大学文学部研究教育年報』	奈良女子大学文学部	文学部全体	第7号~12号(通 巻54号~59号)	年1号	
『寧楽史苑』	奈良女子大学史学会	古代文化学コース、歴史学コース	第56号~61号	年1号	
『奈良女子大学社会学論集』	奈良女子大学社会学研究会	社会情報学コースを中心とした社会 学関係	第18号~23号	年1号	
『奈良女子大学地理学·地域環境学研究報告』	奈良女子大学文学部地域環境 学コース	古代文化学コース、地域環境学コース、社会情報学コース、文化メディア学コース	第7号、第8号	不定期	
『外国文学研究』	奈良女子大学文学部外国文学 研究会		第29号~31号	年1号	24年度に停刊
『欧米言語文化研究』	奈良女子大学文学部欧米言語 文化学会	ヨーロッパ・アメリカ言語文化学コース	第1号~3号	年1号	上記の後続雑誌
『英語学英米文学論集』	奈良女子大学英語英米文学会		第37号~42号	年1号	
『叙説』	奈良女子大学日本・アジア言語 文化学会	日本・アジア言語文化学コース	第38号~43号	年1号	H23年第21 回蘆北賞 (学術誌部門)受賞
『奈良女子大学スポーツ科学研究』	奈良女子大学文学部スポーツ 科学教室	スポーツ科学コース	第13号~18号	年1号	

## (資料Ⅱ-Ⅰ-19:まほろば叢書創刊の辞―創刊号より)

奈良女子大学文学部〈まほろば〉叢書発刊にあたって

全地球を覆う情報と市場のシステムが至るところで綻び始めている時代にあっ て、「文学的知」はどのように行く手を照らす光となりうるだろうか。いかなる知で あれ、その成果はけっして声高にではなく、明朗にして涼やかなる声で発信される ことをみずから望んでいる。いにしえより国の〈まほろば〉であった古都奈良の学 府から、私たちは新しい声をあげたいと思う。人間のいとなみとその歴史について、 また社会と言語にかかわる事象をめぐって、私たちはたゆみない考究と思索の実践、 その交換と伝授につとめてきた。深い学理と精密な論証を必要としながらも、同時 に人間的な肌のぬくもりや息づかいをたいせつにしたいと願う知の研鑽こそが、私 たち文学部が追究しているものである。そうした現場からうまれた、ささやかなし 2012年2月 かし力の結集である成果をお届けしたい。

#### (資料Ⅱ-I-20:まほろば叢書既刊の表紙)



著 2012 年 4 月



第2巻 麻生武·浜田寿 美男著 2012 年 12 月



第 3 巻 吉田孝夫著 2013年1月



第 4 巻 小川伸彦 · 水 垣源太郎編 2014年4月





2015年4月



#### (水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 文学部の教員は文学部の研究目的を達成するために積極的に研究を行ってお り、高い水準を保っている。このことは、学術論文等の発表数、主催した研究会数、国際 交流の件数、競争的資金の獲得額等から判断される。また、近年は学際研究や地域と連携 した研究も盛んであり、後者は地域の活性化にも貢献するものとして県下の自治体からの 評価も高い。以上の点から、研究活動の実施状況は、期待される水準を上回ると判断した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## 観点 研究成果の状況

#### (観点に係る状況)

#### ① 研究業績説明書

○教育システム研究開発センターおよび本学の附属学校との連携による「解釈学的臨床教育学の理論構築と実践」(業績番号 15)の成果である研究書は学会で当該テーマのシンポジウムが立てられるほどのインパクトを教育哲学分野に与えた。

○古代学学術研究センターと連携した研究では、「日本古代の都城と木簡」に関する研究(業績番号8)と「古代東アジアにおける膠生産の研究」(業績番号11)がある。前者は奈良に立地するという本学の特色ある研究で、研究リーダーは書籍編纂のほか国外からの招待講演でも活躍している。後者は日本学術振興会「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の受託研究であり、古代の動物性遺物について動物考古学とプロテオミクスの視点からタンパク質質量分析の手法で分析し、最終評価で「A」判定を得た。この手法の文化財や考古遺物への応用はマスコミ等で大きく取り上げられた。

○ジェンダー研究では、アジア・ジェンダー文化学研究センターと連携した「奈良女子高等師範学校の留学生に関するジェンダー研究」(業績番号1)と文学部の「ジェンダー言語文化学プロジェクト研究」(業績番号2)が挙げられる。前者は戦前の女子留学生教育をジェンダーの視点から考察した研究として反響を呼び、講演やシンポジウムの招待が相継いだ。後者は、プロジェクトリーダーによる単著のほか、教員8名の執筆によるジェンダー入門の教科書もあり、授業の教科書・参考書として好評を博している。

○なら学では、「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」(業績番号 13) が『JST 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発プロジェクトに採択され、評価委員会より高評価を得た。とりくみは複数のメディアで紹介され、プロジェクト対象地域(下市町)は地域づくり活動が評価され、プラチナ構想ネットワーク主催「第2回プラチナ大賞」で優秀賞を獲得。これを機に本学との包括連携協定が締結された。

○平成27年度科学研究費配分で「細目別過去5年の新規採択の累計数の上位10機関」にランクインした分野(日本文学10位、中国文学4位、英語学10位、人文地理学4位)の代表的な研究として、「日本語活字印刷史の研究」(業績番号4)、「宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究」(業績番号6)、「否定の2分法に関する研究」(業績番号7)、「都市空間とジェンダーに関する研究」(業績番号12)があり、うち3名は女性による研究である。

○上記以外にも、書評誌の年末回顧特集でその著書が今年の特筆すべき西洋史の研究とされた「フランス人民戦線の研究」(業績番号 10)、カミュ生誕 100 年を記念のカミュ紹介書に日本人で唯一執筆依頼を受けるなど国際的に高く評価された研究者による「アルベール・カミュの研究」(業績番号 5)、地球温暖化などによる災害の頻発から話題を呼んだ「日本中世の環境変動と関係認識の研究」(業績番号 9)、研究成果図書が第 11 回角川文化財団学芸賞の最終選考 (5 作品) に残った「仏教説話画の研究」(業績番号 3) やアレントを社会学理論の系譜のなかに位置づけた「ハンナ・アレントの思想の研究」(業績番号 14) があり、これらは学会誌の書評等で高く評価されている。

### ② 外部からの賞・評価、分析

奈良女子大学日本アジア言語文化学会の学会誌『叙説』が平成23年第21回蘆北賞(学術誌部門)を受賞したほか、助教の関西社会学会第61回大会奨励賞(H22)の受賞、准教授の漢検漢字文化研究奨励賞「佳作」の受賞(H26)や准教授が翻訳したプロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』が平成24年全国学校図書館協議会第45回「夏休みの本」(緑陰図書)の指定図書(中学校の部)になるなど若手の活躍があった。

#### (水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 文学部の研究は、基礎研究はもとより、学際的な研究等で高い水準にあり、研究を通じた地域貢献では県下の自治体からの評価も高い。以上の点から、研究成果は、期待される水準を上回ると判断した。

## Ⅲ「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目 I 研究活動の状況

#### ○研究支援の充実

平成 25 年度より導入されたサバティカル制度を利用した研究を推奨し、これまでに女性教員 2 名がこの制度を利用して研修を行った。

## ○研究交流集会とまほろば叢書の発刊

学部内の学際研究を奨励するために、第2期より文学部研究交流集会を年に複数回開催している (別添資料  $\Pi$  – I –21)。また、文学部の研究を発信するために、まほろば叢書を発刊し、これまでに7冊刊行した(資料  $\Pi$  – I –19、20、P 1 – 7)。

## (2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## ○科学研究費獲得と主催シンポジウムや研究会の活発化

第1期に各年度の獲得総額3,000~4,500万円であった科学研究費は、2期には3,700~6,200万円前後に増加し、主催シンポジウムや研究会も第1期に各年度平均54件だったものが、2期には各年度平均62件に増加し、研究活動が活発化した。

#### ○女性教員の活躍

第1期終了時に 28.4%だった女性教員比率は第2期終了時点で 32.2%に達し、女性教員の研究面での活躍が顕著である。平成 27年科学研究費配分で「細目別過去5年の新規採択の累計数の上位10機関」にランクインした分野では、女性教員の研究がその大半を占めている(別添資料 II-I-17)。

# 2. 理 学 部

I	理学部の研究目的と特徴・・・	•	•	•	•	•	2 - 2
Π	「研究の水準」の分析・判定	•	•	•	•	•	2 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	•	•	•	•	•	2 - 3
	分析項目Ⅱ 研究成果の状況	•	•	•	•	•	2 - 6
Ш	「質の向上度」の分析・・・・	•		•	•	•	2 - 9

## I 理学部の研究目的と特徴

#### 1 研究目的

奈良女子大学は4つの基本理念に基づき、次のような研究水準及び研究の成果等に関する第2期中期目標を定めた。

## (資料 I - 1: 中期目標)

- ・個性的かつ独創的な研究課題の策定に努め、高度な水準の基礎的・応用的研究及び学際 研究を推進する。
- ・研究成果を国内外に広く発信し、「知的資源」の社会への還元を図る。

これに基づき、奈良女子大学は、中期計画の中で次のような目指すべき研究の水準及び方向性を提示した。

## (資料 I - 2: 研究の方向性)

- ・基礎研究と応用研究をそれぞれ深化させるとともに、それらの連携・融合による学際的研究を推進する中で、以下の方向性を追究する。
  - 1) 高度な水準の基礎的・応用的研究を充実させる。
  - 2) 研究者の個性を活かした独創的研究を育成する。
  - 3) 真理を探究し、文化の発展に寄与する学問を追究する。
  - 4) 社会の現代的諸課題の解決に寄与する研究を推進する。
  - ・女性研究者に対する要請が高い領域や女性の進出の少ない分野の研究を推進する。

また、中期計画には、大学として重点的に取り組む領域として、「自然界の各階層における諸現象を対象とする基礎的・応用的研究、並びに、人間と環境との共生を図るための自然科学的見地からの研究を推進する」ことを挙げている。さらに、研究成果の効果的な社会への発信・還元、学内施設の有効活用と研究基盤設備の整備・充実のための方策を掲げている。これらの中期目標・中期計画に基づき、理学部では、以下のように特色のある研究を行っている。

## 2 特徴

奈良女子大学理学部は、奈良女子高等師範学校の伝統を引き継ぎ、優れた資質をもつ学生と教員を全国から呼び寄せ、基礎科学の重要性を認識し、高い研究レベルの維持・研鑽に努めてきた。平成25年度まで、理学部は、数学科、物理科学科、化学科、生物科学科、情報科学科の5学科体制で、自然科学全体を網羅する学科構成を維持し、各学科において自然現象、生命現象などの謎を究明・解明するための独創性豊かな基礎的研究を行ってきたが、近年の現代社会の急激なグローバル化、価値観の多様化、予測困難な自然・社会現象の変動などを受け、旧来の学問体系にとらわれない学際領域研究も推進し、将来の新開拓・応用研究の展開を見据え、数学と物理学が融合・連携して研究・教育を行う数物科学科と、化学、生物科学、自然環境学が融合・連携して研究・教育を行う化学生命環境学科の2大学科とした。また、ミッションの再定義においては、本学は国際的に水準の高い高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙や物性等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、発生生物学等の基礎生物学分野等の研究実績を活かし、理学諸分野の研究を推進し、これを人材育成に活かすとともに我が国の理学の発展に寄与するとしており、人材育成と結びついた高度な研究が理学部における研究の特徴である。

## [想定する関係者とその期待]

想定する関係者としては、学術面で関係する国内外の研究者(学会)、政府の諮問機関、企業、経済・文化面で関係する地域社会である。関係者からは、本学が高いレベルの基礎科学研究や国内外の研究機関との共同研究等による優れた研究業績により、数学、物理学、化学、生物学、情報科学に関連する学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な進展に貢献すると同時に、地域社会の発展に貢献することを期待されている。

## Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定 分析項目 I 研究活動の状況

## 観点 研究活動の状況

#### (観点に係る状況)

#### 1. 研究実施状況

理学部では、特色を有する研究として、ミッションの再定義にも掲げた国際的に水準の高い高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙や物性等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、発生生物学等の基礎生物学分野等を強みとして研究を推進している。国外及び国内の研究機関との共同研究も活発に行われている。国際及び国内共同研究機関の例を資料  $\Pi-I-1$  に挙げた。

#### (資料Ⅱ-Ⅰ-1:国際及び国内共同研究機関)

#### 国際共同研究機関(一部)

ハーバード大学 (アメリカ)、コペンハーゲン大学 (デンマーク)、ノルウェー科学技術大学 (ノルウェー)、チッタゴン大学 (バングラデシュ)、海南師範大学 (中国)、スミソニアン宇宙科学研究所 (アメリカ)、NASA (アメリカ)、ドイツ・カールスルーエ研究所 (ドイツ)、国際応用シススルーエ研究所 (オーストリア)、チェコ 科学アカデミー動物学研究所 (チェコ)、ハンガリー自然史博物館 (ハンガリー)等

## 国内共同研究機関 (一部)

京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良先端大学院大学、千葉大学等の国内の大学、国立がん研究センター、日本原子力研究開発機構、宇宙航空研究開発機構(JAXA)、高エネルギー加速器研究機構、理化学研究所、農業環境技術研究所(NIAES)、海洋研究開発機構(JAMSTEC)、東京大学大気海洋研究所、国立環境研究所、気象研究所、国立極地研究所、サントリー生物有機科学研究所、大同化学工業株式会社、三菱化学科学技術研究センター、ダイワ産業株式会社、第一鋼業株式会社等

#### 2. 研究成果の発表状況

資料  $\Pi - I - 2$  に、理学部・自然科学系教員の研究成果の状況を示す。年度あたり(平成 22 年度—27 年度)、教員一人あたりの査読付き学術論文数は平均 2.2 件であり、約 93% は英語論文である。第 1 期中期目標期間の業績と比較するために、査読の有無に限らず論文数を集計すると、平成 22 年度 188 件、平成 23 年度 213 件、平成 24 年度 234 件、平成 25 年度 226 件、平成 26 年度 181 件、平成 27 年度 152 件となり、第 1 期中期目標期間(年度あたり 100-195 件)より論文数は増加している。学会発表数についても、第 1 期中期目標期間(年度あたり 59-110 件)より 3-4 倍に、招待講演数は約 2 倍に大きく増加している。また、理学部(平成 24 年度以降は自然科学系教員)が主導的役割を果たした国際・国内会議や学会の開催数は年度あたり平均 12.5 件でその多くは国際学会であり、第 1 期に比べて 2 倍程度に増えている。

## 奈良女子大学理学部 分析項目 I

(資料 II − I − 2 : 理学部 (平成 22 年度 − 23 年度)・自然科学系 (平成 24 年度 − 平成 26 年度) 教員が発表した論文数など) 囲み内は内数

<u> </u>	しなった婦人	<i>3</i> X·4 C /			21107.	「114」3外
	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
査読付き論文数 英文 和文	140 125 25	176 166 9	192 174 14	192 176 16	146 139 7	135 129 6
教員1人あたり の論文数	1.8	2. 2	2.4	2.5	1.8	1.7
著書数	9	11	14	10	9	2
学会発表数	328	379	385	380	423	238
国際学会	68	91	106	107	134	75
招待講演数*	57	63	67	79	81	55
特許取得件数/知 的財産権取得件数		0	0	0	5	0
出願数	0	0	3	2	1	0
会議開催数**	8	13	10	10	10	24
国際会議	7	10	9	8	8	18
ポスドク等 研究員数***	15 (0)	12 (2)	12 (1)	15 (4)	9 (3)	5 (1)

<sup>\*</sup>学会発表数のうちで招待を受けた講演数。

これらの結果は、本学が高いレベルの基礎科学研究による優れた研究業績により、数学、 物理学、化学、生物学、情報科学に関連する学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な 進展に貢献していることを示している。

別添資料  $\Pi - I - 3$  には、理学部教員が開催に主導的役割を果たした国際・国内会議や学会の一覧、別添資料  $\Pi - I - 4$  には、理学部教員の特許出願・取得件数に関する一覧を載せた。

#### 3. 研究資金獲得状況

資料  $\Pi - I - 5$  に、理学部・自然科学系教員の研究資金獲得状況を示す。研究資金の総額は年度あたり 1 億 2 千万円~1 億 4 千万円で、第 1 期中期目標期間と比べて増加し、教員一人あたりの獲得額は約 1,700 千円となっている。科学研究費の研究種目別の申請・採択件数と採択額は、別添資料  $\Pi - I - 6$  に示すように、さまざまな研究種目で採択されており、採択率は第 1 期中期目標期間と比べて約 13% 増加している。また、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金の採択状況の内訳を別添資料  $\Pi - I - 7$  に示す。科学研究費獲得額は第 1 期中期目標期間と比べてやや増加し、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金獲得額は第 1 期中期目標期間と比べて大きく増加している。特に女性教員による獲得額が多く、平成 23 年度以降は、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金全体の獲得額の 80%以上を占めている。

<sup>\*\*</sup>理学部教員が中心的役割を果たした会議や学会の開催数。うち国際会議を内数で示した。

<sup>\*\*\*</sup>日本学術振興会特別研究員 (PD、SPD)、JSPS 外国人特別研究員及び競争的資金で雇用されている者と本学の博士研究員 (無給)を足した数。うち博士研究員以外の者の数を ( ) 内に内数で示した。

## (資料Ⅱ-Ⅰ-5:理学部・自然科学系教員の研究資金獲得状況)

科学研究費採択件数は、その年度の新規と継続を含む。

単位:千円

	平成22年度		平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
研究費資	金総額	122,205	124,393	135,081	138,570	136,730	122,165
教員1人都 研究資金		1,651	1,595	1,595 1,710 1,800		1,848	1,673
	採択件数	_ 37	40	50	54	50	41
	採択率	52.9%	54.8%	55.6%	56.3%	59.5%	45.6%
科学研究費	採択額	40,800	55,905	72,600	66,800	68,700	52,300
補助金	教員1人当た りの科学研究 費獲得額	551	717	919	868	928	716
未红现办	採択件数	7	7	4	5	4	4
委託研究	採択額	69,820	62,892	51,056	51,806	51,229	49,058
受託研究	採択件数	10	12	12	14	14	17
共同研究 寄付金			11,425	19,964	16,801	20,807	

科学研究費及び委託研究、受託研究・共同研究・寄付金受け入れの詳細を別添資料 II-I-8 及び II-I-9 に示す(いずれも研究代表者として採択されたもの)。これらの結果は、本学が高いレベルの基礎科学研究や国内外の研究機関との共同研究等による優れた研究業績により、科学研究費をはじめとする外部資金を獲得し、数学、物理学、化学、生物学、環境科学、情報科学に関連する学会の質の向上や発展、当該学会の国際的な発展に貢献していることを示している。女性教員も研究力を上げ、女子学生のロールモデルとなっていることがうかがえる。

## 4. 研究推進方策とその効果

平成 19 年度公募分より、全学的に科学研究費補助金に申請することが義務付けられており、申請をしない場合は理由を明記することとしている。また、採択されなかった場合でも、審査結果が A 評価である場合には「科学研究費獲得推進費」を配分して研究を推進する方策をとっている。これらの方策の結果、第1期に比べて、理学部教員の科学研究費補助金の申請率は約1%増加し、採択率も増加(約13%)した。

情報発信の工夫として、顕著な業績を上げた場合は、本学のウェブトップページ (「トピックス」) で紹介する他、理学部のウェブページにも詳しい研究紹介を載せている。(参照:http://www.nara-wu.ac.jp/rigaku/2014/00\_research.html)

#### (水準)期待される水準を上回る。

(判断理由) 理学部教員による研究業績は、論文数と外部研究費獲得額から判断して、質・量ともに高い水準を保っており、理学部の活発な研究活動の状況を示している。科学研究費補助金の採択数と獲得額、委託研究、受託研究・共同研究・寄付金の数と獲得額は、理学部の研究が、数学、物理学、化学、生物学、環境科学、情報科学に関連する研究の進展に大きく貢献していること、学会の質の向上や進展、当該学会の国際的な進展に大きく貢献していることを示している。地元企業との共同研究により、関連する発明で特許を取得し、製品が商品化され、新聞で報道された例もあり、地域社会の発展に貢献していることを示している。基礎科学分野、学際研究分野、応用研究分野のいずれにおいてもその研究活動は活発であり、第1期と比較して大きく進展しているといえる。女性研究者の採用・研究力向上についても良好である。これらを総合的に見て、研究活動の実施状況は、期待される水準を上回ると判断した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## 観点 研究成果の状況

## (観点に係る状況)

## 1. 研究業績説明

「研究業績説明書」を踏まえ、資料  $\Pi - \Pi - 1$  に理学部教員の卓越した研究業績について説明する。

## (資料Ⅱ-Ⅱ-1:理学部教員の卓越した研究業績)

「強み」の分野	内容
有機化学・環境保	カビが放出する揮発性有機化合物を迅速かつ非侵襲的に同定できる
全	ガスクロマトグラフ固相マイクロ抽出質量分析法を開発した研究(業
	績番号1) は、学術的な意義に加え、文化遺産の保護等での応用が期
	待され、新聞記事に取り上げられるなど、社会的な反響も大きい。人
	工衛星から観測されたデータを基に、世界で初めて下部対流圏オゾン
	の動態を明らかにした研究(業績番号2)は、中国からの越境汚染の
	実態をとらえたとして新聞でも報道された。タンパク質の動的・静的
	構造の解析方法と応用に関する研究(業績番号3)は当該分野での貢
	献度が大きい。
代数学	無限次元リー代数およびW代数の既約表現の指標の決定問題に取り組
	み(業績番号4)特に、A型の冪零元に付随するW代数の既約最高ウ
	エイト表現の指標の決定等の成果が得られている。これらの結果は、
	この分野における重要な貢献とみなされ、日本数学会の 2013 年度代
Not all hand to	数学賞を受賞した。
数学解析	この研究は、流体力学び電磁流体力学に現れる非線型境界値問題の可
	解性と領域の位相的性質との関係を解明することを目指したもので
	ある(業績番号5)。現在まで、定常的 Navier-Stokes 方程式の境界値
	問題等に関する結果を得ており、これらは数多くの国際学会で報告さ
キーナッド #-m	れているほか権威ある雑誌に掲載されている。
高エネルギー物理	世界で初めて4クオークから成る新しいタイプの新粒子を発見した
学	研究(業績番号6)は、当該分野で最も権威ある学術雑誌に掲載され
素粒子原子核宇宙	た。物理学の常識を変える新発見であり、文化的意義も大きい。   X線分光観測に基づいた解析により、銀河団が動的な系であることを
素粒子原子核子由   等の基礎物理学	
寺の基礎物理子	切りがにした切先(未積番号7)は、ヨ該分野の者名な子州雑誌に拘  載され招待講演も多い。
無機化学	秋され時間も多い。   ナノサイズの分子デバイスである金属錯体の合理的な設計・構築法を
	開発した研究 (業績番号 10)、希土類金属イオンによる単分子磁石の
	合成と磁気特性の解明を行った研究 (業績番号 11)、特定の金属イオ
	ンを標的とする蛍光プローブの合成とそれを用いた細胞内の標的分
	子の検出(業績番号12)は、応用面でも将来が期待できる。
基礎生物科学	ボルボックスを用いた細胞分化と形態形成の解析 (業績番号 13)、ア
2.002.0011	ルツハイマー症に関係するとされる細胞内輸送機能に関与するタン
	パク質の機能解析 (業績番号 14)、マメ科植物と根粒菌の共生成立過
	程における新しい経路を発見した研究(業績番号15)は、将来的な発
	展が期待でき、新聞などでも取り上げられている。
地域社会との連携	奈良市の蔵元と共同で行った野生酵母を利用した日本酒の開発があ
	り、製造方法について特許を取得している。平成25年度文部科学省産
	学官連携支援事業 関西地域会議でも取り上げられ、新聞とテレビで
	も報道された (業績番号 16)。

このように、理学部では、中期目標に掲げた研究の方向性及びミッションの再定義にある、本学の強み一高エネルギー物理学、素粒子原子核宇宙等の基礎物理学、有機・無機複合体等に関連した分子科学、基礎生物学分野等の研究実績一を生かし、理学諸分野の研究を推進した。これらの理学系の研究は、中期計画の研究の方向性に掲げた、女性の進出の少ない分野の研究を推進することとも合致している。

上記及び「研究業績説明書」に記載のように、理学部教員の研究の質は高く、その業績

## 奈良女子大学理学部 分析項目Ⅱ

は Phys. Rev. Lett. (IF:7.943) (業績番号 6、9)、Science (IF:31.364) (業績番号 13)、Nature Communications (IF:11.470) (業績番号 14)、PNAS (IF:9.809) (業績番号 15) といった一流の国際学術誌に掲載されている。また、理学部教員は、2010 年度先端錯体工学研究会賞、第 23 回有機合成化学協会研究企画賞、平成 24 年度日本油化学会進歩賞、関西自然保護機構四手井賞 (2014 年) などの賞を受賞している。

その他、理学部教員は、iCACGP(大気化学とグローバル汚染国際委員会)委員、文部科学省宇宙開発利用委員会委員、環境省・農林水産省・国土交通省所管の自然再生専門家会議委員、奈良県自然環境保全審議会・奈良県レッドデータブック改訂委員、日本学術会議連携会員、国際機関 IUPAC (国際純正・応用化学連合) の 2016-2017 年の Titular Member に選ばれるなど、国内外の委員を務めて活躍している。

#### 2. 外部からの評価

理学部外部評価(2012年3月発行)には、外部評価委員より「奈良女子大学理学部では、 規模の小ささを逆のスケールメリットとして比較的効率よく組織運営がなされている結果、 少ない教員数で質の良い教育と研究がなされており、全体として一定の研究活動が継続的 に行われていることが認められる。」「教員と学生の間に緊密な関係を保ちながら、極めて きめの細かい教育研究が実施されており、これまでに大きな実績を上げてきたことは高く 評価できる。個々の教員が一生懸命努力している様子は、研究業績を見てもよくわかる。」 と述べられている。

理学部教員の新聞やテレビ等で取り上げられた研究成果のリストを資料 II-II-2 に示す。

(資料Ⅱ—Ⅱ-2:理学部教員の新聞等で取り上げられた研究成果)

(貝/// 11	1 2. 産子印教員の利用寺で取り上げられた例元成末)	
報道日	内容	報道・新 聞社
2010/8/3	日米など4ヵ国の国際共同研究チームが、多細胞藻類「ボルボックス」の全遺伝情報 (ゲノム) の解読に成功したことについて、本学理学部 西井一郎特任助教がその研究成果について語った。	毎日
2011/7/26	特集「奈良の大学 なにを研究!?」において、フンチュウを研究する本学理学部准 教授の佐藤宏明が取り上げられた。	産経
2012/2/23	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	日経(夕 刊)、奈 良、産経
2012/2/28	連載記事「奈良の大学 なにを研究!?」において、本学理学部教授の高須夫悟を特 集。	産経
2012/3/15	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	朝日
2012/3/19	CALM 遺伝子の欠損により脳室の拡大や脳皮質の萎縮が起きることについて、本学学生と渡邊利雄人間文化研究科教授が研究発表を行った。	読売
2012/3/20	連載記事「奈良の大学 なにを研究!?」において、本学人間文化研究科教授の渡邊利雄が取り上げられた。	産経
2012/4/25	本学和田恵次教授の、阿波しらさぎ大橋の完成に当たっての本事業へのコメントが 放送された。	四国放送
2012/9/19	本学和田恵次教授の、「『豊かな干潟の象徴』吉野川で激減」のコメントが掲載さ れた。	朝日
2012/11/12	本学和田恵次教授の、「徳島県那賀川高潮工事への提言」が放送された。	四国放送
2013/4/26	元本学理学部准教授で理化学研究所仁科加速器研究センター 肥山詠美子准主任研究 員が自然科学分野で優れた業績をあげた女性研究者をたたえる「猿橋賞」2013年受 賞者に選ばれた。	日経 日経産業 毎日
2013/5/31	邪馬台国の有力候補地とされる桜井市の纏向遺跡で平成3年に出土した巾着袋上の 絹製品が、自然界にいる在来種の蚕の絹でできている可能性が高いことが30日、本 学研究院教授中沢隆らの調査で分かった。	産経 朝日

## 奈良女子大学理学部 分析項目Ⅱ

2013/6/19	桜井市纏向学研究センターの研究紀要「纏向学研究第1号」で本学研究院教授中沢 隆の研究チームが纏向遺跡の絹製品は野生の蛾「ヤママユガ」の絹糸製であるとの 見解を示した。	朝日
2014/3/12	光化学スモッグの原因となる地表付近のオゾンの分布を本学と米ハーバード・スミソニアン天体物理学センターのチームが人工衛星のデータを使って把握することに世界で初めて成功したことが本学研究院自然科学系 林田佐智子教授のコメントともに紹介された。	毎日
2014/3/13	アルツハイマー病の発症にかかわるたんぱく質を、本学の研究院自然科学系の渡邊 利雄教授と東京大学の研究チームがマウスで見つけたと、英科学誌ネイチャー・コ ミュニケーションズに発表した。	毎日新聞
2014/4/22	コーナー「ならフシギ」で奈良公園の鹿の夜の行動について、本学和田恵次教授の コメントが掲載された。	読売
2014/5/25	学びの現場のコーナーで、理学部が地元と協力しながら研究成果を生かした純米酒の開発に力を入れていること(「奈良の八重桜」「奈良の八重桜~クルスタルチェリー」)、理学部の改組のことが紹介された。	読売
2015/2/	本学渡邊利雄教授の、「不明であった皮膚がんを抑え込む機構を解明」について掲載された。	旺文社 大学受験 パスナビ
2015/7/7	本学和田恵次教授の、共生科学研究センターの活動解説が掲載された。	奈良放送
2015/9/7	本学和田恵次教授の研究紹介として、「干潟のカニ 人間みたい」が紹介された。	読売
2015/9/18	9月21日から23日まで本学で開催予定の錯体化学会第65回討論会が取り上げられた。	科学
2015/9/30	北海道大学、東北大学、東北大学と、本学戸田幹人准教授が共同研究を行っている、「化学反応の切り替えスイッチ」について、北大と東北大が共同研究者がプレスリリースを行った。	日経
2015/12/14	本学和田恵次教授の研究紹介として、「奈良女子大 干潟にすむ小さいカニの行動 は人間社会の縮図を見るよう!」が紹介された。	旺文社 蛍雪時代

#### 3. 定量的分析

上に述べたように理学部教員の研究の質は高く、定量的にも引用回数やダウンロード回数が多い。1つの例として、新粒子を発見した研究(業績番号6)は、物理学で最も権威ある学術雑誌に掲載され、これまでの被引用回数は200と非常に注目度の高い論文である。本学の強みの1つである物理学分野における素粒子研究のレベルの高さを表している。

(水準) 高い水準にあると評価される。

(判断理由) 理学部では、研究業績の中期目標に掲げた研究の方向性及びミッションの再定義にある、本学の強みを生かした理学諸分野の質の高い研究が推進されており、その水準は、業績が国際的な一流学術誌へ掲載され、学会等の賞の対象や新聞等に掲載されているほか、理学部教員が国内・国外の科学諸分野での重要な委員として活躍していることからも明らかである。

## Ⅲ 「質の向上度」の分析

## (1)分析項目 I 研究活動の状況

平成22年度から平成26年度に本学は、文部科学省「女性研究者養成システム改革加速」事業に採択され、本学の中でも特に女性教員比率の低い理学系・工学系の女性教員を計画に沿って採用してきた。その結果、平成21年度には14.8%であった理学部の女性教員比率は、平成27年度には23.3%となった。採用された助教には研究を促進させるためにメンターが配置され効果を上げている。女性の外部資金獲得件数と獲得額も上に述べたように良好である。これらの結果は、「女性研究者養成システム改革加速」事業の採択を契機として、第2期に理学部女性教員の研究力が向上していることを示しており、重要な質の変化があったと判断できる。

## (2)分析項目Ⅱ 研究成果の状況

上に述べたように、第1期に比べて第2期では、論文数や学会発表数の増加、外部資金獲得数・獲得額の増加が認められ、外部評価でも高い評価を受けるなど、研究成果に関しても質的に向上していると判断できる。第2期に理学部は中期目標・中期計画の課題を真摯に受けとめ、理系女性人材育成を行うと共に高度な研究を進めてきたといえる。

# 3. 生活環境学部

I	生活環境学部の研究目的と特徴	•	•	•	•	•	3 - 2
П	「研究の水準」の分析・判定	•	•	•	•	•	3 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	ě	•	•	•	•	3 - 4
	分析項目Ⅱ 研究成果の状況	•	•	•	•	•	3 - 16
Ш	「質の向上度」の分析・・・・					•	3 - 18

## I 生活環境学部の研究目的と特徴

#### 1 生活環境学部の研究目的

生活環境学部は、学部の目標として「生活の根幹である衣・食・住や家族の環境など、生活を取り巻く様々な生活環境を教育研究の対象とし、生活に関わる諸問題を科学的に分析し、高度な教育・研究を進め、生活診断力や生活改善力に優れ、生活者の目で見て社会をリードできる女性専門職業人を養成すること」(資料 I - 1)を掲げている。この目的に即して、生活環境学部は、生活科学(家政学)に関わる先進的研究を行って社会に発信することをめざしている。それにより、後継の女性研究者の育成もはかっている。

## (資料 I-1:各学科の教育目的)

【食物栄養学科】http://www.nara-wu.ac.jp/life/food/

食物栄養学科では「食」にかかわるバイオサイエンスの高度な研究・教育を行うと同時に、人間栄養学にかかわる分野を充実させ、科学概念と同時に実践的知識を身に付けた食物・栄養分野における日本のリーダーとなる専門家の育成を目的とします。

【心身健康学科】http://www.nara-wu.ac.jp/life/health-new/

人の健康を、生活の基本である衣・食・住だけでなく、社会環境、生活習慣、身体、運動、こころ、発達、教育などの多様な視点・観点から総合的に学ぶことを目的としています。こころと身体の健康を定量的あるいは定性的に分析することで科学的に考える能力を養い、健康な生活のあり方を提案できる人材を養成します。

【情報衣環境学科】http://www.nara-wu.ac.jp/life/lics/index.html

情報衣環境学科は、衣環境学と情報工学の基本的事項や先端技術を教育・研究し、安全で快適な衣環境の構築、モバイル装置としての衣服の構想、並びにライフ・コンピューティングによる生活改善を行うための専門知識や技術を身につけた人材の養成を目的とします。

【住環境学科】http://www.nara-wu.ac.jp/life/resed02/

住環境学は、安全・安心で、快適に生活することができ、自然環境とも共生できる住環境を総合的に創り上げていくことを目指した学問体系です。住まいのインテリアから建築、都市、地域にいたる広範な領域を対象に、生活者の視点に立った質の高い生活空間の計画・設計・管理するための技術を学びます。

【生活文化学科】http://bunka-nwu.info/

生活文化学科では、私たちのくらしにまつわるほとんどすべてのことがらを学べます。複雑化・高度化・ 国際化した現代社会のくらしの課題を解決していくためには、従来の学問の枠組みを超えて、より総合 的にものごとを捉える「教養」が求められています。本学科では、人文社会科学の様々な学問分野の視 点から、衣食住に関する文化や歴史、人びとの心理や人間関係、地域経済、法文化、福祉制度など、生 活を知的に探求します。

## 2 生活環境学部の構成

生活環境学部は、平成5年10月に家政学部から改組して成立し、生活環境学科及び人間環境学科の2学科制をとることになった。平成26年の改組により、「食物栄養学科」「心身健康学科」(生活健康学コース・スポーツ健康科学コース・臨床心理学コース)「情報衣環境学科」(衣環境学コース・生活情報通信科学コース)「住環境学科」「生活文化学科」の5学科となり、現在に至っている。教員数は計67名、うち女性32名である(女性比率47.8%)(資料I-2)。

(資料 I - 2:学科・コース別教員数、平成27年5月1日現在)

	学科	専任	教員数	うち女性教員数	女性教員比率(%)
食物栄養学科			3	8	61.5
.c. 白 / 市 (市	生活健康学コース	6		3	50.0
心身健康 学科	スポーツ健康科学コース	6	1 7	3	50.0
<del>-5-</del> 17+	臨床心理学コース	5		2	40.0
情報衣環境	衣環境学コース	8	4 -	3	37.5
学科	生活情報通信科学コース	7	1 5	1	14.3
	住環境学科	1	1	6	54.5
生活文化学科			1	6	54.5
	合計	6	7	3 2	47.8

## 3 各学科・コースの研究目的

各学科およびコースの研究目的を資料I-3の通り定め、ウェブサイトで公表している。

#### (資料 I - 3: 各学科およびコースの研究目的)

#### ①食物栄養学科

食物という身近な素材から人々の健康増進、疾病予防を考え、健康長寿社会推進に貢献することを目的に、食物の栄養性、機能性、嗜好性、安全性、食環境などについて研究を行う。研究対象は化学物質(DNA、タンパク質、脂質、ビタミン、ポリフェノール等)や細胞などのミクロ分野から、個体、ヒト集団などのマクロ分野まで多岐にわたっており、ライフサイエンスを基礎として、医学や農学分野等と連携した学際性の高い最先端の研究を行う。

## ②心身健康学科

#### a) 生活健康学コース

主に生活環境や生活習慣が健康に与える影響について、衣食住、運動、休養、ストレスなど様々な視点から、生理学、人間工学、生化学、神経科学、薬理学、行動科学など様々な手法を用いて総合的に研究する。

#### b) スポーツ健康科学コース

体育・スポーツ、こころやからだをとりまく諸課題について、スポーツ科学・体育学の視点から、人文科学および自然科学的手法を用いて、法学、社会学、表現学、生理学、心理学、バイオメカニクスなどの領域による学際性の高い研究を行う。

#### c) 臨床心理学コース

現代社会では、うつ、不安、嗜癖問題(依存症)、不登校、非行などさまざまなこころの問題がある。このようなこころの問題に関することについて実践的な立場から研究する。

#### ③情報衣環境学科

#### a) 衣環境学コース

時代の要請する安全で快適な衣環境の構築を目指して、衣環境素材としての高分子や繊維 集合体、アパレルの設計と生産、コンピュータ支援ファッションデザインや ウェアラブ ルコンピュータなどのフロンティア技術、並びに衣の管理と再利用について研究を行う。

#### b) 生活情報通信科学コース

時代の要請する先端 ICT の習得を目指して、セマンティック Web やバーチャルリアリティ、エージェント等の応用技術、ならびに基盤システム開発やソフトウェア工学等の基礎技術に関する研究を行う。

#### 4住環境学科

安全・安心で快適に生活することが可能で自然環境とも共生できる住環境を生活者の視点から創造するための理論と方法を研究する。住生活、コミュニティ、建築デザイン、光・音・熱・空気などの物理的特性、空間構造と材料の性質、住環境形成の歴史、制度やしくみ、ランドスケープなど多様な側面から研究する。

#### ⑤生活文化学科

豊かで安定した生活を希求する人間の文化的・社会的特性と生活環境との関連を研究する。人文社会科学の様々な学問分野の視点から、衣食住に関する文化や歴史、ジェンダー、家族、法と社会、人びとの心理や人間関係、地域経済などについて総合的に研究する。

## 4 生活環境学部における研究の特色

生活環境学部における研究の特色は、学際性と実践性にある。衣・食・住の観点のみならず、環境・健康・情報・文化の観点もまじえて研究が行われており、その学際性の広さは顕著である。また、理論的研究に加えて、実践的・応用的研究もさかんに行われている。研究に対する評価はきわめて高く、それは科学研究費取得率の高さや外部資金の獲得の多さに反映されている。また、女性教員の比率が高く、ジェンダー研究や女性の身体・生活に重点を置いた研究が活発である。

#### [想定する関係者とその期待]

関係者として主に想定されるのは、「日本家政学会」をはじめとして学術面で関係する諸学会、経済・文化面で関係する地域社会、「衣食住」を中心とする産業分野である。これら想定される関係者の期待とは、生活科学(家政学)の学問的発展に対する貢献、地域社会との相互交流にもとづく研究成果還元、そして、産業界のニーズにあわせた、あるいはニーズを引き出す先進的な研究成果の公表及び研究協力である。

# Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定 分析項目 I 研究活動の状況

## 観点 研究活動の状況

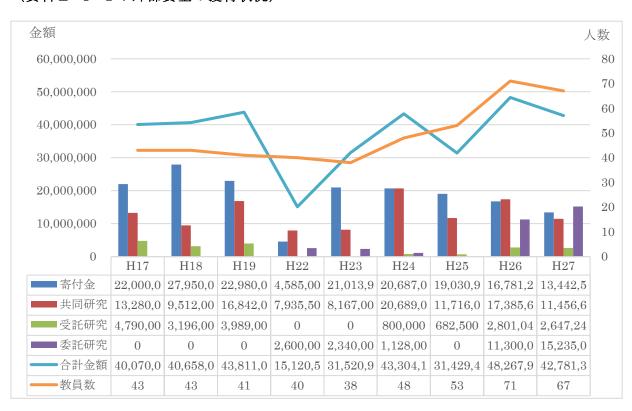
## (観点に係る状況)

#### (1) 研究実施状況

学際的・実践的研究をめざすという生活環境学部の研究方針にしたがい、各学科で、それぞれの特色を生かした研究に取り組んでいる。それが成果をあげていることは、科学研究費や外部資金の獲得件数の多さ、企業との共同研究の多さに反映されている。企業や地域との共同研究では、委託研究や寄付金研究が多いことに、社会的ニーズに合致した研究が行われていることが示されている。平成 25 年度、26 年度、27 年度と科研費以外の外部資金の合計額は 4000 万を超えている(資料  $\Pi$  – I – I )。また、科学研究費基盤研究(A)、(B)を利用した学際的比較研究も活発に行われている(資料  $\Pi$  – I – I )。

海外からの招聘件数はそれほど多くないとはいえ、国際的共同研究に関しても研究者の交流がよく行われている(資料  $\Pi$  – I – 3)。地域連携としては、奈良県・奈良市、奈良県内組織・機関と積極的に連携し、貢献している。また、多数の教員が、その専門性を生かし、国や関西の各自治体において多様な審議会等の委員を務めているほか、各種学会の理事・役員をつとめ、学術研究の発展に寄与している(資料  $\Pi$  – I – 4)。

## (資料Ⅱ-Ⅰ-1:外部資金の獲得状況)



生活環境学部外部資金獲得件数

工品采兑 1 的 7 的 员 亚及 1 1 1 5 1 5 1 5 1 5 1 5 1 5 1 5 1 5 1										
年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計件数			
寄付金	10	19	23	22	21	23	118			
共同研究	14	9	8	9	12	10	62			
受託研究	0	0	2	1	3	1	7			
委託研究	2	2	2	0	2	3	11			
合計件数	26	30	35	32	38	37	198			

# 奈良女子大学生活環境学部 分析項目 I

(資料Ⅱ-I-2:科学研究費を使った学際的比較研究事例)

学科・講座・コース	種目	H22	H23	H24	H25	H26	H27(直接)	課題名
住環境	基盤研究(B)(一般)			2,700,000	5,100,000	3,600,000	2,200,000	日中韓の住生活スタイルに基づいた快適性と省エネルギーに配慮した照明計画の検討
住環境	基盤研究(B)(一般)			3,300,000	3,300,000			中国・内モンゴル自治区におけるバイシンの間取りの変容に関する研究
住環境	基盤研究(B)(海外学術調査)						3,100,000	ネパールの世界遺産都市における生活空間と都市型住居の保全に向けた基礎的研究
住環境	基盤研究(B)(海外学術調査)	1,900,000	1,400,000	1,100,000	1,100,000			スマトラ島沖地震被災地における都市部近郊の大規模再定住地の居住環境に関する研究
心身健康·臨床心理	基盤研究(B)(一般)						2,300,000	大規模災害後の犯罪対策に関する実証的研究—犯罪発生の予防と犯罪不安の低減のために
心身健康·臨床心理	基盤研究(B)(一般)						1,400,000	高等学校における不登校と"社会で生きていくカ"支援プログラムの開発と追跡調査
生活文化	基盤研究(A)(一般)	5,600,000	5,300,000					歴史における周縁と共生一疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼
生活文化	基盤研究(A)(一般)	他機関					8,200,000	ジェンダー視点に立つ「新しい世界史」の構想と「市民教養」としての構築・発信
生活文化	基盤研究(B)(一般)	他機関		5,100,000	4,000,000	4,200,000		歴史教育におけるジェンダー視点の導入に関する比較研究と教材の収集及び体系化
生活文化	基盤研究(B)(海外学術調査)		4,800,000	3,700,000	2,900,000	1,800,000		アジアにおけるリプロダクションの歴史的変遷-医療化の要因と女性への影響
生活文化	基盤研究(B)(海外学術調査)						4,400,000	南アジア農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究

# (資料Ⅱ-Ⅰ-3:国際共同研究)

	国際共同研究	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
	国际 六间 训 九	年	年	年	年	年	年	
食	海外出張·研修件数	1	5	0	3	0	1	10
物	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	0	1	1	0	2
住	海外出張·研修件数	3	3	3	4	5	2	20
環	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	0	0	0	0	0
文	海外出張·研修件数	6	7	6	9	8	1	37
化	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	2	1	1	1	3	8
衣	海外出張·研修件数	0	0	0	0	0	0	0
10	海外研究者の招聘・受け入れ件数	1	0	0	0	0	0	1
情	海外出張·研修件数		<b>±</b> :	设置		0	0	0
報	海外研究者の招聘・受け入れ件数		不言	汉 但		0	0	0
健	海外出張·研修件数	1	3	4	6	3	2	19
康	海外研究者の招聘・受け入れ件数	0	0	1	0	1	1	3
スポ	海外出張·研修件数		±=	设置				0
ポ	海外研究者の招聘・受け入れ件数		不言	汉 但				0
心	海外出張·研修件数		±:	·····································				0
理	海外研究者の招聘・受け入れ件数		未設置					0
	合計	12	20	15	24	19	10	77

## (資料Ⅱ-I-4:国・地方自治体・学術団体等の委員・役員等 (平成 27 年度))

	4:国・地方目治体・学術団体等の委員・役員等 (平成 27 年度))
	委員名称 
国・地方自治	○国・公益(全国)
体の委員等	日本学術会議会員
	文科省「不登校に関する調査研究協力者会議」委員
	文部科学省 大学設置・学校法人設置審議会 大学設置分科会専門委員(体育学)
	文部科学省「平成 27 年度いじめ対策等生徒指導推進事業審査委員会」委員
	文部科学省「不登校生徒に関する追跡調査委員会」
	科学研究費審査委員・学振補助金審査委員
	奈良地方裁判所委員会委員
	大阪医療刑務所 自己改善指導 (窃盗犯罪再犯防止) プログラムアドバイザー
	日本体育協会創立 100 周年記念事業準備委員会・スポーツ宣言起草・WG
	日本体育協会・国体活性化プロジェクト委員
	一般社団法人日本スポーツ法支援・研究センター役員
	○奈良県
	奈良県産業教育審議委員会委員
	奈良県建築士審査会委員
	奈良県模大規模小売店舗立地審議会委員
	奈良県健康福祉部事業評価検討会議
	奈良県医療審議会委員
	奈良県工業技術センター外部評価委員会委員長
	奈良県立医大ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員
	奈良県公衆浴場入浴料金協議会委員、奈良県家庭教育支援 (講師)
	奈良県スポーツ推進審議会委員
	奈良県 なら 10 歳若がえり推進事業プログラム評価委員
	奈良県入札監視委員会委員
	奈良県国土利用計画審議会委員
	奈良県古都風致審議会委員
	奈良県私立学校審議会委員
	奈良県いじめ防止基本方針検討協議会
	○奈良市
	奈良市学校保健理事会、奈良市スポーツ推進計画策定委員会委員
	奈良市スポーツ推進審議会委員、奈良市スポーツ振興審議会委員
	奈良市地域子育て支援センター事業実施団体審査委員会委員長
	奈良市つどいの広場事業実施団体審査委員会委員長
	<b>  奈良市社会福祉審議会</b>
	児童福祉専門分科会・分科会長
	<b> </b> 奈良市立中学校給食導入検討委
	市立奈良病院運営市民会議委員
	<b>  奈良市防災会議委員</b>
	○奈良県下
	大和郡山市情報公開・個人情報審査会委員
	桜井市 PFI 学校給食センター整備事業審査会委員
	○大阪府下
	大阪府情報公開審査会委員
	大阪府森林審議会委員
	高槻市情報公開・個人情報審査会委員(副会長)
	寝屋川市情報公開・個人情報審査会委員(副会長)
	枚方市委託業務総合評価員
	枚方市包括外部監査人選定審査会委員(副会長)

○京都府下

京都市地球温暖化対策推進委員会委員

○兵庫県下

兵庫県地域安全まちづくり審議会委員

神戸市少年事件等に関わる教育課題を考える会委員

○その他

東京都「いじめ問題に関する研究」推進本部

## 学術団体の役 員等

○理事長

奈良体育学会、日本スポーツ法学会

○副理事長

ジェンダー法学会、日本ジェンダー学会

○理事

日本生理学会、ジェンダー史学会、比較家族史学会、日本油化学会、日本調理科学会、 日本発汗学会、日本スポーツ社会学会、日本バイオメカニクス学会、日本生理学会、 日本生気象学会、日本遊戯療法学会、アジアスポーツ法学会、日本スポーツ法学会、 日本体育・政策学会、一般社団法人日本スポーツ法支援・研究センター

日本犯罪心理学会、日本ヒューマンケア心理学会

○幹事

日本睡眠学会、日本生理学会、日本生気象学会、日本生気象学会、日本体育学会北関東地域、日本体育学会北関東支部、高分子学会関西支部、日本青年心理学会

○評議員

生理人類学会、日本人間工学会、日本ビタミン学会、日本栄養改善学会、日本家政学会、日本給食経営管理学会、日本生理学会、日本体育学会、日本運動生理学会、日本体力医学会、日本生気象学会、日本体育学会体育社会学専門領域

○編集委員

日本バイオメカニクス学会、日本ダンスセラピー協会、日本繊維製品消費科学会、 Journal of Physiological Science

日本犯罪心理学会、日本心理学会、日本ヒューマンケア心理学会、

日本カウンセリング学会

○研究審査委員

Welcome trust 医学研究 (英国)、Auckland 医学研究財団研究 (ニュージーランド)

○その他の委員

日本体力医学会将来構想計画委員会、日本繊維製品消費科学会 快適性・健康研究会、 日本スポーツ産業学会法学分科会運営委員、日本体育学会「体罰・暴力根絶特別委員 会」協力委員

#### (2)研究成果の発表状況

研究成果の発表は、著書・論文・研究発表のすべてに関して順調に行われている。著書は、各学科とも1年あたり6~10件にのぼり、教員1人あたり年0.5冊程度の換算となる。 外国語で執筆された著書も一定数ある(資料 $\Pi$ -I-5、 $\Pi$ -I-6)。

各学科の専門性を反映して、研究成果の公表方法については学科ごとに特徴がある。生活文化学科では著書数が多く、また著書・論文ともに単著の比率が高い(資料  $\Pi$  – I – G 、  $\Pi$  – G – G )。食物栄養学科では、査読付の国際学会誌への掲載が非常に多い。ほぼすべてが共著であり、かつ外国語論文である。スポーツ健康科学コースでも同様の傾向が強い。これに対して、住環境学科と生活文化学科では、国内学会誌への掲載が多い。生活文化学科では依頼論文が多いが、これは、文系の研究領域ではしばしば査読は若手の投稿論文を中心とし、中堅以上は編集委員会等からの依頼によって論文を執筆するというパターンが広く行われている実態を反映している(資料  $\Pi$  – G )。

教員 1 人あたりの年間論文平均数は、1.3 から 4.3 まで開きがある。臨床心理で論文数が多いのは、いじめや犯罪など社会のひずみに敏感に対応した研究へのニーズに適切に応えているからである(資料  $\Pi-I-8$ )。他方、フィールドワーク・芸術活動の成果は住環境学科が非常に多く、年間 30 件近くが発表されている。これは作品としての住宅設計の発表が多いこと、ならびに地域や景観・文化財保存に大きく貢献していることを反映している(資料  $\Pi-I-9$ )。

国内学会については、食物栄養学科がきわだって多いが、他の学科も1人あたり年間2~6件の発表が行われている(資料  $\Pi$  – I –11)。国際会議での発表は、一般・シンポジウム・ポスターセッションなどさまざまな形できわめて活発に行われている(資料  $\Pi$  – I –12)。

研究成果は、個人が公表するほか、いくつかの方法で組織的に発信している。①奈良女子大学家政学会発行『家政学研究』(年2冊刊行、最新号は 124 号、目次については http://www.nara-wu.ac.jp/life/hea/kenkyu.html 参照)、②科研費研究に関する独自ウェブサイト、③公開シンポジウム等の企画・主宰である(資料 II-I-10)。

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
食物栄養学領域	11	11	2	3	8	11	46
生活健康学領域		9	1	2	3	5	17
衣環境学領域	4	2	4	4	16	15	39
住環境学領域	7	1	10	7	7	4	36
生活文化学領域	6	5	9	8	12	16	56
臨床心理学領域				3	6	2	11
スポーツ健康科学領域					6	9	15
生活情報通信科学領域					1	0	1
合計	28	19	26	27	59	62	221

(資料Ⅱ-I-5:著書数の学科別総数・経年変化)

教員一人あたりの件数

(資料 II - I - 6:著書の内訳) [※() 内は共著、「外」は外国語による執筆の内数。]

著	書の内訳					心身健康		情報衣	環境		合計	
	音数・(外)はうち外国語 執筆数	食物栄養	住環境	生活文化	スポーツ (H26-27)	臨床心理 (H26-27)	生活健康	衣環境	情報通信 (H26-27)	総数	うち 共著	うち外 国語
	単著	7(6)(外1)		1	2(外1)	1				- 11	6	2
	編著			2			4(3)(外3)			6	3	3
著書	共編著	2(2)	8(8)	12(外1)	3(1)		4(2)	11(11)(外8)		40	24	9
	編著・共編著以外 の共著(分担執筆)	21(20)(外 2)	4(3)(外1)	23(9)(外2)	4(2)	4	7(4)(外1)	4(4)	1(1)	68	43	6
	単著	10	1(1)	2		1		3(3)		17	4	
資料集·調	編著			4(2)						4	2	
查研究報告	共編著	1(1)	5(5)	2(2)		1				9	8	
書等	編著・共編著以外 の共著(分担執筆)		15(13)(外1)	7(1)	4			21(21)(外21)		47	35	22
事典・辞典	編著			1	1					2		
等(担当項	共編著					3				3		
日数(士[ ])	編著・共編著以外 の共著(分担執筆)	3(2)	1	1			1			6	2	
	単独訳											
翻訳書	監訳											
	共訳	2(1)	1(1)			1	1			5	2	
上記分類が 不明な場合	著書・報告書等		1(1)	1	1					3	1	
	書の合計	:31	36(32)(外2)	56(14)(外3)	15(3)(外1)	11	17(5)(外4)	39(39)(外29)		221	130	42
	者数(H22~H27)	79	73	64	12	11	41	35				
1人・1年	Fあたりの件数	0.58	0.49	0.88	1.25	1	0,41	1.11				

(資料Ⅱ-Ⅰ-7:論文の内訳)

学				H224			H23年			H244			H25年			H26年			H274	F		合計	
科	国際学会	論文	総数	うち共著 19	うち外国	裁数	うち共 者	うち外間 語 25	#数		うち外国語		うち共著	うち外国	10.00	うち共著	うち外国	総数	うち共 著	うち外国語	総数	うち共著 112	うち外間部
	国際子芸 の学会誌 等	査読無	19	19	19	25	25		10	10	10	20		20			20		12				112
ł	国内学会		16	16	10	1 2	1 2	1 2	17	17	2	1 17	1 17	1 5	3 14	3 14	3 6		6		72	7 72	7 28
耳	の学会誌 等	・ 査読無 依頼論文	5	5		5	5		4	1		4	4		3	3		3	3		24	24	
*	大学・研究機関の		1	1		1	1		3		2	2	2					1			7		2
養学	紀要等	依頼論文	3	3		2	2		4	4		4	4		2	4	2	i			3 17		ļ ,
科	1	上記以外の論文	3	3	2		2				2			- 1									
	分類不明	学術論文(査読付)				2			1			9											20
١		論文の合計 うちデータを把握できた人数)	44	13(12	31	38	36 12(11	28	46	14(13	22	57	57 14(14	35	54	52 13(13	38	30	13(1		o,	く人数7:	176 9(76)
	国際学会の学会誌	査読付 査読録							2	1		1	1		1	1	1	4	3		8	6	1
-	等 国内学会	依頼論文 査読付	5	5		4	4		1	1		10	10		8	6		3	3		31	29	
	の学会誌		8	8		8 2			8			3			2			1			30	30	
	大学・研 究機関の	査験付	-			2	2		2	2								_			4		
学	紀要等	依賴論文				1									1			1			3		
科		術的一般雑誌等 L記以外の論文	1			2						2	1	1	2	- 1	1				7	2	2
	分類不明	学術論文(査読付) 学術論文(上記以外)	2	1		3	2	1	- 1	1	1										6	4	2
	在籍者数(	論文の合計 うちデータを把握できた人数)	21	14 13		22	16 12	1	14	13 12	1	16	15 13	1	15	10 12	2	10	11		98	76	5 ₩73
	国際学会 の学会誌	査読付										2	1	2	2		2	3		3			
	#	佐頼論文																					
	国内学会 の学会誌	査読無	4	2	1	1			1			4	2		4	2		2			16		1
	等 大学·研		2			1		1	4 2	1 2		3	2		1 2			1			11 10		
化学	究機関の 紀要等	依頼論文	1			1						3 1			6			3			13		
14		術的一般雑誌等 L記以外の論文	1			1 1			4			2 1			5 2			2			13 8		
	分類不明	学術論文(査読付) 学術論文(上記以外)													1						1		
		<b>論文の合計</b> うちデータを把握できた人数)	11	10(6	1	5	10(7)	1	12	11(8	0	20	11(9)		23	11(9)	2	- 11	11(9	3	82 の・	16 く人数6	4 (48)
	国際学会の学会誌	査読付 ・ 査読無	9	9		6	<u>6</u>	6	<u>6</u>		6	10 2	10 2			4	5	9					46 8
-	等国内学会	依頼論文	8	7	3	3	2		4	4		4	4	2	4	4		4	4	1	27	25	6
	の学会誌		1			1	1		1			1 3			2			3			3	1	
境	大学・研究機関の	査読付		<u> </u>								1		1				Ľ			1		
7	紀要等	依頼論文							1												4		
ス	1	L記以外の論文										3											
	分類不明	学術論文(査読付) 学術論文(上記以外)							2	2	2				1	1	1	1	1	1	4	4	4
		論文の合計 うちデータを把握できた人数) 査読付	19	4(4)		11	10 4(4)	7	15	13 5(5)		24	6(6)	15		8(8)		20	8(8		<b>ග</b>	ベ人数3	65 5(35)
	国際学会																						
	の学会誌	主統無													6			12			18		
	等 国内学会	・ 主腕無 依頼論文 ・ 主腕付													6			2			8		
活情報	等 国内学会 の学会誌 等	金																					
活情報通信	等 国内学会誌 等 大学・研 究機関の	金 整無 依賴論文 查 上 查 上 查 上 查 上 查 上 查 上 查 上 查 上 查 上 查						未	設置						6			2			8		
活情報通信科学	等 国内学会 の学会 等 大学・研究 記要等	全 整網 依賴論文 全 整件 依賴論文 全 整件						*	設置						6			2			8		
活情報通信科学	等 国の学会 等・研の記事 学・	金融無 依頼論文 全腺付 全腺素 依頼論文 全腺素 依頼論文 全腺析 全腺素 依頼論文 全腺析 全腺素 依頼論文 等的一般雜誌等 E即以外の論文 学術論文(金融付)						*	投催						6			2			8		
活情報通信科学	等 国内学会誌 ・	を映解 依頼論文 ・ 査験付 ・ 査験解 依頼論文 ・ 査験解 依頼論文 ・ 審的一般報訟等 ・ 記以外の論文 ・ 学術論文(査談付) ・ 学術論文(査談付)						*	設置						8 8			2 8			8 16		
活情報通信科学コース	等学会誌 内学会誌 大学・研究記要等 分類不明 在籍者数(5	を映像 位無協文 ・ 主統領 ・ 主統領 ・ 企業所付 ・ 主統第一 ・ 企業施付 ・ 主統第一 ・ を統領 ・ を統領 ・ を統領 ・ を統領 ・ を統領 ・ を統領 ・ を統領 ・ である ・ でる ・ で	6	T 6	6	9	9	未	設置	3	4	6	6	6	6			2			8 16 42		14(6)
活情報通信科学コース	等 国内学会誌 大学・研の 記要等 ・学・研の 記要等 ・学・研の	を映像 体制能文 主教例 を表現付 主教例 を表現付 主教例 を表現付 主教例 を表現付 主教例 を表現付 主教例 を表現付 主教例 を表現して 主教例 を表現して を表現まする を表現まする	6	6	6	9	9	未 9	<b>股電</b>	3	4 1	6	6	6	8 8		4	2 8		4	42 00 33 1	ペ人数 32 1	33 1
活情報通信科学コース 生	等学会 学問の学学・関の学等・関の学等・関係等学・関係を 学り 明 本籍者学会 第 中 学 明 学 上 明 初 () 会	を映像 体制能文 主教例 体制能文 主教例 体制能文 主教例 体制能文 主教例 体制能文 を明明 を明明 を明明 を明明 を明明 を明明 を明明 を明明 を明明 を明	6 1 2	2		9	9	+	4 1	1	1	6	6	6	8 8		4	2 8		4	42 00 33 11 14	ペ人数 32 1 1 9	33 1 1 3
活情報通信科学コース 生活健	等学会は 一切の学等 子の 一切の学等 子の 一切の学等 子上 明 一 本語歌学等 子上 明 一 本語歌学等 子の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	を映像 位無論文 主教付 主教師 位無論文 主教師 位無論文 主教師 位無論文 主教師 (他無論文 主称以外の論文 学術論文(主配以外の論文 主を以外の論文 主を以外の論文 主を以外の論文 主を以外の論文 主を以外の論文 主を以外 主教師 主文を教 を表	6	2		9 2 1	9	身	4	1 2	1	6 2 1 1	6 2 1 1		8 8	7(3)	4	22	7(3	4	42 00 33 1	ベ人数 32 1 1 9 5	33 1 1 3
活情報通信科学コース 生活健康学	事 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学 学	を映像 位無論文 主教付 主教師 位無論文 主教所 位無論文 主教所 を表現 の一般相談等 こむ以外の論文 学術論文(主記以外) 論文の合計 主教師 位無論文 主を以外) 主文の会別 主教師 を表現 の一般相談等 こむ以外の論文 主ない外 主教師 主ないの にないか 主教師 を表現 の一般相談 を表現	6 1 2	1				身	4 1 5 2	1 2	1	1	1		20	7(3)	4	22 8	7(3	4	42 02 33 33 1 1 14 6 7	ベ人数 32 1 1 9 5	33 1 1 3
活情報通信科学コース 生活健康学コー	等 学 学	を映像 位無論文 主教付 主教師 位無論文 主教所 位無論文 主教所 を表 の一般相談等 を知以外の論文 学術論文(主記以外) 論文の合計 主教に対 主教師 企工を以外) 主教の 主教の 主教の 主教の 企業 を表 の 主教の 企業 の 主教 の 主教の 主教の 主教の 主教の 主教の 主教の 主教の 主教の	6 1 2	1				9	4 1 5 2	1 2	1	1	1		20	7(3)	4	22 8	7(3	4	42 00 33 11 14 6	ベ人数 32 1 1 9 5	33 1 1 3
活情報通信科学コース 生活健康学コー!	等	生 主教無 (金額 ) 全数 (金額 ) 会数 (金額 ) 全数 (金額 ) 会数 (金額	6 1 2	1				9	4 1 5 2	1 2	1	1	1		20	7(3)	4	22 4 3	7(3	4	42 02 33 33 1 1 14 6 7	ベ人数 32 1 1 9 5	33 1 1 3
活情報通信科学コース 生活健康学コース	等	本鉄橋     佐飯園文     金銭付	1 2 2 1 1	11	7		1	9	4 1 5 2 2	1 2	1	1	10	7	200 4	7(3)	2	22 8 22 4 1	7(3) 4	2	422 00 333 1 1 14 6 6 7	ペ人数 322 1 1 9 5 2	33 1 1 3 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース	等 学会 等 等の 学生 明 明 学 等 学	生態無 (金額倫) 文 ・ 主統領 ・ 全統領 ・ 全統領 ・ 全統領 ・ 全統領 ・ 会統領 ・ 会統 を ・ 会談 を ・ 会 、 ・ 会談 を ・ 会 ・ 会談 を ・ 会談 を ・ 会 ・ 会談 を ・ 会談 を ・ 会談 を ・ 会談 を ・ 会談 を ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会 、 を ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会 ・ 会	1 2 2 1 1	1 1	7	1	1	9	4 1 5 2 2	1 2	1	1	1	7	20 44 22 11 22 8	7(3) 4	2 6	22 8 22 4 1	7(3 4	2	422 003 333 111 144 677 11	ペ人敷 32 32 1 1 1 9 5 5 2 2 2 5 2 4 数 4 1 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	33 1 1 3 1 1 2 2 41 1(32) 17
活情報通信科学コース 生活健康学コース ス	等学会 南内学等学書 研の 第二年 新年	生 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 を教師文 春的一般雑誌等 と記以外の論文 学術語文(主記以外) 神術語文(主記以外) 神術語文(主記以外) 本教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教師 佐賀師文 主教所 佐賀師文 大郎 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 佐賀 本教所 本教所 佐賀 本教 佐賀 本教 本教所 佐賀 本教 佐賀 本教 本教 佐 本教 本教 佐 本教 本 本 本 本 本 本 大 本 た た た た た た た た た た た た た	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4	7(3) 4 2 2 6 7(6)	2	22 8 4 3 11	7(3) 4 3 3 7 8(6) 11	2	42 20 33 31 11 14 66 77 11 12 2	ペ人數 32 1 1 2 2 2 2 2 5 2 ★數4 17 1	33 1 1 3 1 1 2 2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポー	等学会等・調要・ 一、明 では、 一、 「 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	生 主教 を教 を を を を を を を を を を を を を を を を を	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 2 2 1 1 2 8 8 1 1	7(3) 4 2 6 7(6) 6	2 6 6 1	22 8 4 3 11	7(3) 4 4 3 3 7 6(6) 11	2	422 20 333 11 14 67 7 17 17 11 11 13 3	- 本人數 32 1 1 1 9 5 5 2 2 2 - 1 1 1 9 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	33 1 1 3 1 1 2 2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健	国内学等学・副子・「国内学等学・副子・「国内学等学・副子・「国内学等学・国内学等学・国内学等学・国子・「国内学等学・国子・「国内学等学・国子・「国内学等学・国子・「国内学学・学・「国内学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・	生 主教 を教育 (金属) (金属) (金属) (金属) (金属) (金属) (金属) (金属)	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 44 1 1 2 2 9 6 1 1	7(3) 4 2 6 7(6) 6	2 6 6 1	22 8 3 11	7(3 4 4 3 3 3 5 6 6 6 1 1 1 1 3 3 3 5 6 6 6 6 1 1 1 3 3 5 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6	2	422 422 333 1 1 1 4 6 6 7 7 1 1 2 2 17 1 1 3	★人數 322 1 1 1 1 9 5 5 2 2 2 2 5 2 4 数4 17 7 1 3 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康	■四学等・単二等 の 国の 大克和 ( ) 在国際で 国の 大克和 ( ) 日本	生 変数無 (金額 を で で で で で で で で で で で で で で で で で で	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 4 2 2 2 1 1 1 1 6	7(3) 4 4 2 2 6 7(6) 8 1	2 6 6 1 1 1	22 8 3 1 11 3 13 8	7(3 4 4 3 3 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2	42 00 33 33 11 14 66 77 17 17 11 13 3 14 44 14	《人數 32 1 1 1 9 6 5 2 5 2 4 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コ	専用学等・開展 伊藤 中山 明 の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 領 田藤学寺 学会	主教権     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     等所の一般報識等     記以外の論文     学術論文(上記以外)     き教育論文(主記以外)     主教術     後東島村     主教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     本教	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 3 8 6 1 1	7(3) 4 2 2 6 6 7(6) 8	2 6 6 1 1 1	22 8 3 1 11 3 1 3 8	7(3 4 3 3 1 1 7 7	2	42 0 3 3 3 3 1 1 1 4 6 7 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	《人數 322 1 1 1 9 6 5 2 2 5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コ	専用学等・開展 伊藤 中山 明 の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 領 田藤学寺 学会	主教権     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     主教術     依頼論文     等所の一般報識等     記以外の論文     学術論文(上記以外)     き教育論文(主記以外)     主教術     後東島村     主教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     在教術     本教術     本教	1 2 2 1 1	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 2 2 2 2 3 6 1 1 1 6	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6	2 6 6 1 1 1	22 8 3 1 11 3 13 8	7(3 4 4 3 3 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2	42 00 33 33 11 14 66 77 17 17 11 13 3 14 44 14		2 41 1(32) 17 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース	「	本映像     依照論文     本映付     本映像     依照論文     本映像     依照論文     本映像     依照論文     本映像     市的一般相談等     上記以外の論文     本映析     市的一般相談等     本映析     和版	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 4 1 2 2 1 1 1 1 6 6 1 1 1	7(3) 4 2 2 8 6 6 6 1	2 6 1 1 1	22 4 4 3 11 3 11 3 8	7(3 4 4 3 3 3 1 1 1 7 7 2 2 1 2 6 6 6 6 6 6 6 6 6 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	6)	422 000 333 111 144 665 771 111 133 134 144 144 144 144 14	→人數 32 32 1 1 5 5 2 5 2 5 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 4 4 4	33 11 11 33 11 11 22 41 1(32) 17 11 11 2
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース	関連   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日	生 変換無 位 解論文 生 変換	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 2 2 2 2 3 6 1 1 1 6	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6	2 6 1 1 1	22 8 3 11 3 1 3 1 1	7(3) 4 3 3 9 7 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	6)	422 000 333 111 144 665 771 111 133 134 144 144 144 144 14	32 32 1 1 1 9 5 5 2 2 3 4 1 7 7 1 1 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	33 11 11 33 11 11 22 41 1(32) 17 11 11 2
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース	関	生 変数無 (金額無) (金額無) (金額無) (金額時) 文 変数例 (金額時) 文 変数例 (金額時) 文 変数例 (金額時) 文 多数例 (金額時) 文 (金額時) (金額時) 文 (金額時) (金額時	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 4 2 2 2 1 1 1 1 6 6 1 1 1 1 8	7(3) 4 2 2 8 6 7(6) 6 1	2 2 2 6 6 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	22 8 3 11 3 1 3 1 3 1 3 3 1	7(3 4 4 3 3 1 1 7 7 2 2 1 2 8 6 (6	6	422 003 333 111 144 113 1144 1144 1144 1144 1144 1144 1146	ペ人敷 32 32 1 1 1 9 5 5 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	33 11 11 33 11 11 22 41 1(32) 17 11 11 2
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨	国の 国の 大党 記 分 在国国の 国の 大党 記 分 在国国 の 国の 大党 記 分 在国国 の 国の 大党 記 分 在国 の 国 の 大党 記 分 在国 の 国 の 大党 記 分 に 国 の 国 の 大党 記 会談 会談 新の 等 学上 明 近 会談 会談 新の 等 学上 明 近 会談 会談 新の 等 学上 明 近 会談 会談	生 変数無 (金額 を で で で で で で で で で で で で で で で で で で	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 2 2 2 2 3 6 1 1 1 6	7(3) 4 2 2 8 6 6 6 1	2 6 1 1 1	22 8 3 11 3 1 3 1 1	7(3 4 4 3 3 3 1 1 1 7 7 2 2 1 2 6 6 6 6 6 6 6 6 6 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	6)	422 000 333 111 144 665 771 111 133 134 144 144 144 144 14	ペ人敷 32 1 1 1 9 5 5 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	33 11 11 33 11 11 22 41 1(32) 17 11 11 2
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨床心	国内 大党紀   分 在国内 国の 大党紀   分 在国内 国内 大党紀   分 日本	本	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2 2 14	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 3 6 6 1 1 1 6 2 18	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6 1 1 1 4 6(6)	2 2 6 6 1 1 1 1 1 1 1 0 0 0	22 8 3 11 3 11 3 1 3 1 3 1 3 3 1 3 3	7(3 4 4 3 3 3 1 1 1 7 7 2 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6	4 2 8 11 1 12	### ##################################	32 32 1 1 1 9 5 2 2 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	333 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨床心理コ	曹四年 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 分 在国の 国の 大党紀 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	主教師     依頼論文     生教師     依頼論文     生教師     依頼論文     生教師     依頼論文     生教師     依頼論文     生教師     依頼論文     生教師     有の一般報     ま教師     本教師	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 1 5 2 2 2	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 3 6 1 1 1 6 1 1 8	7(3) 4 2 2 8 6 7(6) 6 1	2 2 8 6 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	22 8 3 11 3 11 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1	7(3 4 4 3 3 1 1 7 7 2 2 1 2 8 6 (6	6	### ##################################	ペ人敷 32 32 1 1 1 9 5 5 2 2 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	333 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨床心理コース	国内学等・順大 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	本	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2 2 14	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 3 6 6 1 1 1 6 2 18	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6 1 1 1 4 6(6)	2 2 6 6 1 1 1 1 1 1 1 0 0 0	22 8 3 11 3 11 3 1 3 1 3 1 3 3 1 3 3	7(3 4 4 3 3 3 1 1 1 7 7 2 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6	4 2 8 11 1 12	### ##################################		333 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨床心理コース	国内学等・順大 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 分 在国内 国の 大党紀 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	本	12 22 11	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2 2 14	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 8 8 6 1 1 1 6	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6 1 1 1 4 6(6)	2 2 6 6 1 1 1 1 1 1 1 0 0 0	22 4 4 3 1 1 3 1 3 8 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1	7(3 4 4 3 3 1 1 7 7 2 1 1 26 6 (6 0 0 9 9	4 2 8 11 1 12	42 00 33 11 11 11 11 11 11 11 11 11		333 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
活情報通信科学コース 生活健康学コース スポーツ健康科学コース 臨床心理コース	■内学等・学術学・ 日本	本映像     依照論文     本映付     本映析     本明論文(全映付)     本映析     本版     本映析     本映析     本映析     本版	12 2 2 1 1 1 1 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2	11	7	1	1	9	4 1 5 2 2 2 14	1 2	1	1	10	7	20 4 1 2 2 8 8 6 1 1 1 6	7(3) 4 2 2 6 7(6) 6 1 1 1 4 6(6)	2 6 6 1 1 1 1 0 0	22 4 4 3 1 1 3 1 3 8 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1	7(3 4 4 3 3 1 1 7 7 2 1 1 26 6 (6 0 0 9 9	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	422 003 333 111 144 665 002 177 171 133 144 144 144 144 145 166 177 177 177 177 177 177 177		333 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

# 奈良女子大学生活環境学部 分析項目 I

(資料Ⅱ—Ⅰ—8:1人あたりの論文数)

			<b>◆</b> ★ ₩	1人・1年		論文内訳	
Ė	学科・コース	延べ在籍者数 (H22 - H27)	論文数 合計 (H22-H27)	あたりの論文数	査読付論 文件数	依頼論文 件数	外国語 論文件 数
食物栄養学科		79	269	3.4	185	12	176
•	住環境学科	73	98	1.3	43	12	5
生	活文化学科	64	82	1.3	33	14	8
情報衣	衣環境学コース	35	101	2.9	73	10	65
環境学 科	生活情報通信科学 コース*	14	42	3	26	0	18
	生活健康学コース	41	65	1.6	47	9	41
心身健康学科	スポーツ健康科学 コース*	12	49	4.1	34	5	22
<b>原子科</b>	臨床心理学 コース*	11	47	4.3	9	0	4
	合計•平均	329	753	2.3	450	62	339

\*H26-H27

# (資料Ⅱ-Ⅰ-9:芸術系の活動・フィールドワーク等)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
食物栄養学領域					1		1
住環境学領域	30	27	27	27	27		138
生活文化学領域	5	4	1	1	1		12
合計	35	31	28	28	29	0	151

#### (資料Ⅱ-I-10:独自のウェブサイトや公開シンポジウムを通じた研究成果の発信事例)

- (1) 科研費研究成果を発信する独自ウェブサイト
- ○生活文化学科のサイト (バナーリンク)

「リプロダクションとジェンダー」https://reproculture.wordpress.com/参照「ジェンダー史(比較ジェンダー史研究会)」http://ch-gender.jp/wp/参照

(2) 公開シンポジウム(奈良女にて開催、企画主宰の場合に限る)

2013年:公開シンポジウム「歴史のなかのセクシュアリティー同性愛/性的指向の比較文化史」

2014年:公開シンポジウム「歴史を読み替えるージェンダーから見た世界史」 公開研究会「ケアとジェンダー」

2014年:公開シンポジウム「オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズムを問う」

2015年:公開シンポジウム「セクシュアリティとジェンダー〜性的指向の権利保障をめぐって〜」

2015 年:公開シンポジウム「嘉納治五郎が構想したオリンピック ~日本におけるオリンピズムの受容と展開~」

- (3) 臨床心理相談センターの講演・セミナー
- ○2013 年 臨床心理相談センター開設記念講演(第1弾~第10弾)

日本人の心からみた「体罰問題」

子どもの気持ちを受けとめるということ

今, あらためて"いじめとは何か"を問い直す~悲劇をくり返さないために~

心理職を目指す人のためのハローワーク

子どもを支援するファシリテーション

発達障害を抱える親の子育で支援

近代日本のうつ病を解剖する -うつを病む人々に寄り添うために-

カウンセリングに学ぶ相手の話を聞く技術

行動分析学による明るい療育相談 -事例から学ぶ支援方法-いのちの授業

○2014 年 臨床心理相談センターセミナー (第1回~第10回)

臨床心理士が語るこころの世界のおもしろさ

思春期の子どもの心とその関わり

#### 涙活

カウンセリングに学ぶ話を聴く技術

奈良の大仏と華厳: ユング派心理療法との接点

谷川俊太郎の世界に耳をすませば

日本の中の世界、世界の中の日本:グローバルな舞台における森田療法の貢献

「よりよい人間関係を築くためのコツ」現代人の人格のあり様ー科学の時代の人格構造ー 臨床心理学へのいざない

隅野由子のことばの世界

○2015 年 臨床心理相談センターセミナー(第1回~第6回+特別回)

奈良女・臨床心理学コースの最先端

高齢者と犯罪

カウンセリングに学ぶ 話の聴き方・伝え方

女性の生涯発達とアイデンティティ-現代の「個」と「関係性」をめぐって-

(男女共同参画推進機構との共催)

心理援助職向け特別セミナー

こころの世界のおもしろさ

流産・死産による悲嘆を考える

(資料Ⅱ-Ⅰ-11:国内学会における研究発表等の内訳)

₹ <u>171 म</u>	-1-11,  国内子云にわり。	של של וליי כ	女サツ	L 1 H/ / /				
	国内学会	H22 年	H23 年	H24 年	H25 年	H26 年	H27 年	合計
	招待講演	4	8	7	4	3		26
	一般発表	96	89	92	83	64	32	456
食物栄養	シンポジウム発表	9	5	5	2	1	1	23
栄養	ポスターセッション	13	36	30	23	24	25	151
丧	その他(コメンテーター・司会等)						1	1
	国内学会発表数合計	122	138	134	112	92	59	657
	招待講演	1	2	1	1	1	1	7
	一般発表	21	36	47	58	61	31	254
住環	シンポジウム発表	1	1	21		1	1	25
境	ポスターセッション	1	5	4	4	2	2	18
	その他(コメンテーター・司会等)	1		1	3	4	2	11
	国内学会発表数合計	25	44	74	66	69	37	315
	招待講演		2		2	2	1	7
生	一般発表	4	2	3	5	5	6	25
生活文化	シンポジウム発表		1	1	3	3	1	9
化	ポスターセッション		3	3	1	2	1	10
	その他(コメンテーター・司会等)			3	6	6	6	21
	国内学会発表数合計	4	8	10	17	14	15	68
	招待講演	3	2	2	5	4	3	19
	一般発表	6	7	8	20	14	24	79
衣環	シンポジウム発表	1	2	6	7	8	10	34
境	ポスターセッション	5	7	8	9	9	15	53
	その他(コメンテーター・司会等)				1		1	2
	国内学会発表数合計	15	18	24	42	35	53	187
	招待講演							
	一般発表					8	7	15
情報	シンポジウム発表		未設	置		1	1	2
TIA	ポスターセッション						2	2
	その他(コメンテーター・司会等)					9	7	16
	<b>国内学会発表数合計</b> 招待講演	2	5	2	1	18	17	35 13
	一般発表	29	32	19	22	16	10	128
生	シンポジウム発表	29	2	2	4	0	10	11
生活健	ポスターセッション	7	11	12	8	13	5	56
康	その他(コメンテーター・司会等)	3	3	3	2	2	1	14
	国内学会発表数合計	43	53	38	37	33	18	222
	招待講演							
	一般発表					5	5	10
スポ	シンポジウム発表					4	1	5
	ポスターセッション		未設	置		12	19	31
ッ	その他(コメンテーター・司会等)					2		2
	国内学会発表数合計					23	25	48
	招待講演					1	1	2
π <b>∠</b> -	一般発表					6	4	10
臨床	シンポジウム発表		-+ =n	· <del>*</del>		2	4	6
心理	ポスターセッション		未設	自		10	7	17
生	その他(コメンテーター・司会等)					7	6	13
	国内学会発表数合計					26	22	48

# 奈良女子大学生活環境学部 分析項目 I

(資料Ⅱ-Ⅰ-12:国際学会における研究発表)

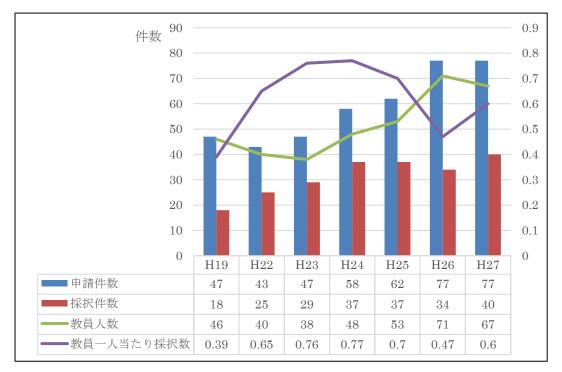
	<b>材Ⅱ - 1 - 12</b> : 国际子云に							
	国際学会	H22 年	H23 年	H24 年	H25 年	H26 年	H27 年	合計
	招待講演	1						1
食	一般発表	3	1	2	5	3		14
物栄	シンポジウム発表	2	1					3
養	ポスターセッション	7	20	11	31	19	24	112
	その他(コメンテーター・司会等)	2				2		4
	国際学会発表数合計	15	22	13	36	24	24	134
-	招待講演	1				1	1	3
,,	一般発表			5	17	12	9	43
住環	シンポジウム発表	2	1	1			1	5
境	ポスターセッション	1	8	7	4	8	3	31
	その他(コメンテーター・司会等)					2		2
	国際学会発表数合計	2	9	13	21	23	14	82
_	招待講演			1		1		2
生	一般発表		2		3	2	3	10
活文	シンポジウム発表	1				2		3
化 化	ポスターセッション		2		6	1	2	11
	その他(コメンテーター・司会等)		1					1
	国際学会発表数合計	1	5	1	9	6	5	27
	招待講演							
	一般発表	4	2	3	8	8	11	36
衣環	シンポジウム発表							
境	ポスターセッション			1	2	2	8	13
	その他(コメンテーター・司会等)						1	1
	国際学会発表数合計	4	2	4	10	10	20	50
	招待講演							
_	一般発表					3	6	9
情	シンポジウム発表		未討	ひ 置				
報	ポスターセッション		- 1 - 1	~—				
	その他(コメンテーター・司会等)							
	国際学会発表数合計			T		3	6	
_	招待講演	1						1
	一般発表							1
牛			1	2	5	2	1	11
生活	シンポジウム発表	1		2 3	1	3	1	
生活健康	シンポジウム発表 ポスターセッション	1 3	14					11 9 67
健	シンポジウム発表 ポスターセッション その他 (コメンテーター・司会等)	3	14	3 11	1 11	3 13	1 15	11 9 67 1
健	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計		14	3	1	3	1	11 9 67
健	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計 招待講演	3	14	3 11	1 11	3 13	1 15	11 9 67 1
康 -	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表	3	14	3 11	1 11	3 13	1 15 17	11 9 67 1 89
健康・スポ	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計 招待講演 一般発表 シンポジウム発表	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13	1 15	11 9 67 1
康 -	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション	3	14	3 11 16	1 11	3 13	1 15 17 1 1 2	11 9 67 1 89
健康・スポ	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計 招待講演 一般発表 シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等)	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13 18	1 15 17 1 1 2	11 9 67 1 89
健康・スポ	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計 招待講演 一般発表 シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13 18	1 15 17 1 1 2	11 9 67 1 89
健康・スポ	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他 (コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション         その他 (コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13 18 5 5	1 15 17 1 2 1 4	11 9 67 1 89 1 7
健康・スポーツ・臨	シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計 招待講演 一般発表 シンポジウム発表 ポスターセッション その他(コメンテーター・司会等) 国際学会発表数合計	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13 18	1 15 17 1 1 2	11 9 67 1 89
健康・スポーツ・臨床	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表	3	14 1 16 未記	3 11 16	1 11	3 13 18 5 5	1 15 17 1 2 1 4	11 9 67 1 89 1 7
健康・スポーツ・臨	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション	3	14 1 16	3 11 16	1 11	3 13 18 5 5	1 15 17 1 2 1 4	11 9 67 1 89 1 7 1 9
健康 スポーツ 臨床心	シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表         ポスターセッション         その他(コメンテーター・司会等)         国際学会発表数合計         招待講演         一般発表         シンポジウム発表	3	14 1 16 未記	3 11 16	1 11	3 13 18 5 5	1 15 17 1 2 1 4	11 9 67 1 89 1 7

## (3) 競争的資金の獲得状況

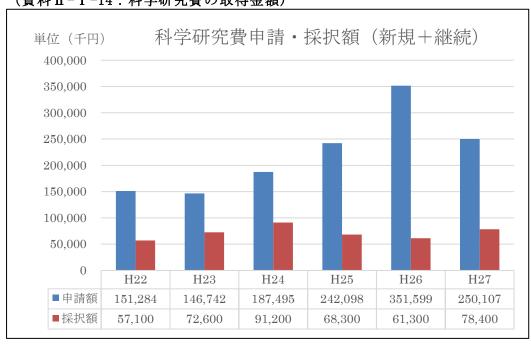
## ①科学研究費の獲得状況

科学研究費の獲得状況はすこぶる良好である。平成 27 年度の採択件数は 40 件(教員 1人あたり 1.68)であり(資料  $\Pi$  – I –13)、採択額の合計は合計 7840 万円であった(資料  $\Pi$  – I –14)。採択額の内訳では、基盤研究 (A)や基盤研究 (B)が採択額の中心を占めている。しかし、近年では、挑戦的萌芽研究や若手研究 (A)が伸びている(資料  $\Pi$  – I –15)。また、研究テーマは各学科の特色を生かしたものとなっており、多くの教員がコンスタントに科学研究費を取得している(別添資料  $\Pi$  – I –16)。

(資料Ⅱ-I-13:科学研究費の取得状況)

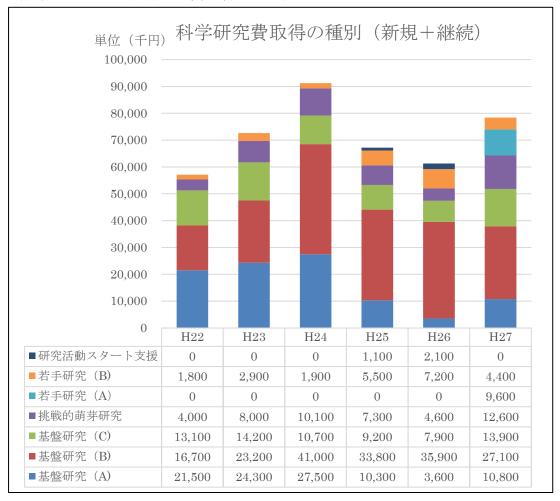


(資料Ⅱ-Ⅰ-14:科学研究費の取得金額)



## 奈良女子大学生活環境学部 分析項目 I

(資料 II - I -15: 科学研究費取得の種別)



#### ②科学研究費以外の外部資金(委託研究・受託研究・寄付金等)の獲得状況

委託研究・受託研究・寄付金等の獲得件数は多い。件数は、平成 24 年度以降は、毎年 40 件前後になっており、増加傾向にある。平成 22~27 年の総獲得資金は、 2 億 1200 万を超える(間接経費込)に達する(資料 II-I-1、P3-4)。また、企業との共同研究が多く、社会的ニーズに合致した研究が行われている(別添資料 II-I-17)。

#### (水準)期待される水準を上回る。

(判断理由)判断の理由として、4点を指摘できる。①論文・著作・発表のいずれの形式においても、研究業績がコンスタントに発表されている。②科学研究費は、各学科コースにおいて過半数の教員が取得している。③企業や自治体からの委託金等については、学科・コースによって取得率の差が大きいが、理系学科では多額の外部資金が取得できている。④公開シンポジウムやインターネットを通じた一般への情報発信にも熱心に取りくんでいる。

以上の点について、評価される水準を上回ると判断できる。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## 観点 研究成果の状況

#### (観点に係る状況)

#### (1)研究成果の特徴と質

「研究業績説明書」が示す通り、各学科の研究目的に即した優れた研究成果が発表されており、研究成果は学術的・社会的に高い意義を有する。

- (1)食物栄養学科では、「健康増進、疾病予防」という目的に即して、生活習慣病予防(業績番号2)、食中毒(業績番号14)に関する研究が発表されており、ともに国際的に高い評価を得ている。
- (2)住環境学科では、「安全」「生活者の視点」という目的に即し、インド大津波後の住宅再建(業績番号11)、新しい生活様式に見合った設計(業績番号13)を発表したほか、ランドスケープデザインでは国土交通大臣賞及び日本造園学会賞を受賞した(業績番号12)。
- (3)衣環境学科では、合成繊維製品の高機能化の研究で繊維学会論文賞を受賞し(業績番1)、高次構造解析手法の開発の研究により繊維学会賞を受賞し学会でも高く評価されている(業績番号10)。
- (4)生活文化学科では、アジアのリプロダクションについて海外調査をふまえた研究が行われており、助産師に期待・歓迎されている(業績番号7)。他方、ジェンダー史については学術会議の取組と連動しながら他大学の研究者と学際的研究を進めており、学界及び教育現場で高く評価されている(業績番号6)。
- (5)生活健康学コースでは、交感神経活動が睡眠時等に果たす役割に関する研究がインパクト・ファクターの高い雑誌に掲載されており、国際的影響が大きい(業績番号 15)。また、体温と血流との関係(業績番号 5)、閉経後の女性の肥満に関する研究(業績番号 3)は着実に成果を上げており、国際的に定評のある雑誌に掲載されている。
- (6)スポーツ健康科学コースでは、オリンピックに関する比較研究が行われ、関連シンポジウムを成功させる(資料 II I 一10 参照)など注目を集めている(業績番号 4)。
- (7)臨床心理学コースでは、東日本大震災と犯罪に関する研究が大きな注目を浴び、マスコミに多数出演した(業績番号8)。また、不登校の予後に関する研究が日本ヒューマンケア心理学会優秀発表賞を受賞した(業績番号9)。

## (2) 学術的意義・メディアからの注目

学術的意義をはかる指標の一つである受賞歴は、年間数件ある(別添資料  $\Pi - I - 18$ )。また、とくに臨床心理の諸研究はメディアから注目されており、テレビ出演や新聞でのコメントが多い(資料  $\Pi - I - 19$ )。知的財産権についても毎年  $1 \sim 5$  件ほぼコンスタントに特許出願がなされている(資料:  $\Pi - I - 20$ )。

(資料Ⅱ-Ⅰ-19:マスコミ報道件数)

年度	合計			
十段		テレビ	ラジオ	新聞等
22	28			
23	25	4	1	
24	9	2		
25	38	16		22
20	(うち臨床心理 27)	(うち臨床心理 15)		(うち臨床心理 12)
26	28	5		23
20	(うち臨床心理 15)	(うち臨床心理 5)		(うち臨床心理 11)
27	35	17		18
21	(うち臨床心理 27)	(うち臨床心理 16)		(うち臨床心理 11)
合計	163	44	1	63

<sup>\*</sup>臨床心理学コースは2013年より設置

## 奈良女子大学生活環境学部 分析項目Ⅱ

## (資料Ⅱ-I-20:知的財産権の取得状況)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
特許出願件数	1	1	1	5	0	3
特許登録件数	1	2	1	1	1	0

(水準)期待された水準を上回る。

(判断理由)判断の根拠として、以下の3点を指摘できる。①各学科の研究目的に即した研究が着実に行われている。②研究評価も総じて高い。③社会的ニーズに適合した研究が多い。以上の点において、期待された水準を上回ると判断できる。

## Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### 1. 質の向上度

#### (1)研究活動の状況

研究活動の状況について、以下の通りである。

①科学研究費の獲得状況は、第 1 期より大幅に向上している。科研費取得状況は、申請件数は教員人数に比例して伸びているが、採択件数はそれを上回って伸びている。一人当たりの採択件数は、平成 19 年度の 0.39 から急増し、0.47 から 0.77 件に達する( $\Pi$ -1-13)。金額では、第 1 期では 2007 年 7630 万円(教員数 46)が最高で、2009 年は 5610 万円(教員数39)であったのに対し、第 2 期では、2012 年 9120 万円(教員数 48)と教員数の増加以上に金額が増加している( $\Pi$ - $\Pi$ -1-15)。第 2 期 6 年間の教員 1 人あたり平均は 143 万円であった。

②科研費以外の外部資金の獲得金額は、おおむね年間 4000 万円以上にのぼり、2014 年実績は 4827 万円であった。これには、 1 件 900 万円以上の委託研究(食物)も含まれる(別添資料 II - I - 15)。第 1 期に比べると、寄付金が減り、委託研究等が増えており、全体として外部資金の多様化の傾向がうかがえる(II - I - 1)。

③一人あたり年間著書件数は、0.59(H19年度)から 0.70(H22-H27年度平均)に上昇している( $\Pi$ -I-5)。同論文件数は、3(H19年度)から 2.3(H22-H27年度平均)にやや減少しているが、4を超える学科もある。また、第 2 期の論文総数(753 件)のうち 68%が査読付論文(450 件)及び依頼論文(62 件)であり、外国語論文比率は 45%と、論文の質はきわめて高い( $\Pi$ -I- $7、<math>\Pi$ -I-8)。一人あたり年間国内学会発表件数は 4.8 件にのぼり(H19年度は 3 件)、同国際学会発表件数は 1.21 件(H19年度は 0.48 件)と第 1 期から比べて倍増している( $\Pi$ -1- $11、<math>\Pi$ -1-12)。学科の特徴を反映して、理系学科・コースのほとんどでは英語を用いた共同の研究活動、文系学科・コースでは単独の著述活動が中心となっている。

#### (2)研究成果の状況

研究成果の状況について、以下の通りである。

①第1期に比べると、研究の国際比較や国際協力が拡大している(Ⅱ-I-2)。東日本大震災やインド大津波などの大規模災害、子どもや犯罪、男女共同参画の現状をふまえ、第1期よりも研究の実践性が強まっている。

②すべての学科・コースにおいて、各学科・コースの研究目的に即した高度な研究が行われている(研究業績説明書)。マスコミ報道件数は臨床心理がきわだって多く、コース新設置の効果が表れている( $\Pi$ -1-19)。受賞も毎年コンスタントに見られる(別添 $\Pi$ - $\Pi$ -18)。

③理系学科・コースではインパクト・ファクターの高い雑誌への掲載が多く、文系学科・ コースでは単著による著作活動が学会や関係者から高い評価を得ている(研究業績説明書)。

#### 2. 注目すべき質の向上

第1期に比べて、第2期で大きく質の向上があったのは、①災害・犯罪などのリスクに対応する研究の発展、②ジェンダー研究の進展、②うつを含む心身の健康をめぐる研究の活性化である。これらについては、「研究業績説明書」及び科研費・外部資金取得一覧(別添資料 $\Pi - I - 14$ 、 $\Pi - I - 15$ )が示す通り、学界及び産業界、社会のニーズに即して実践的・理論的な研究が学際的に展開されており、その点において注目すべき質の向上が見られる。

# 4. 人間文化研究科

Ι	I 人間文化研究科の研究目的と	:特徴 ・・・4-2
П	Ⅱ 「研究の水準」の分析・判別	É · · · · · 4 − 3
	分析項目I 研究活動の状況	况 ・・・・・4-3
	分析項目Ⅱ 研究成果の状況	况 ・・・・・4 - 6
П	Ⅲ 「質の向上度」の分析 ・・	• • • • • • 4 – 9

## I 人間文化研究科の研究目的と特徴

#### 1 研究目的

人間文化研究科の研究教育の理念は、学際化、高度化、個性化であり、また、研究水準及び研究の成果等に関する中期目標として、『個性的かつ独創的な研究課題の策定に努め、高度な水準の基礎的・応用的研究及び学際研究を推進する』ことを掲げており、理念と目標は同一の目的を表現している。これらを受けて、中期計画で以下の目標を設定している(資料 I-1)。

## (資料 I-1:中期計画 2-1-1-1)

『基礎研究と応用研究をそれぞれ深化させるとともに、それらの連携・融合による学際研究を推進する中で、以下の方向性を追求する。』

- 1) 高度な水準の基礎的・応用的研究を充実させる。
- 2) 研究者の個性を活かした独創的研究を育成する。
- 3) 真理を探究し、文化の発展に寄与する学問を追求する
- 4) 社会の現代的諸課題の解決に寄与する研究を推進する。

#### 2 特徴

大学院は、2度の改組を経て、博士前期課程 12 専攻、博士後期課程 4 専攻となっている。 平成 24 年度から、教員組織と教育組織に分かれ、それまで大学院と学部とで別々のポストであったものが統一されたため、人事交流が行われやすくなっている。また、構成員の殆どが大学院に所属しており、専門分野も多様であるため、上記の研究目的を達成するために充分な人員構成となっている。

中期計画においては、大学として重点的に取り組む領域として以下の研究分野を策定している。

- 1) 古代学を基盤とした「なら学」の研究
- 2) 人間の近接環境と生体の調節機能の研究
- 3) 自然科学の基礎的・応用的研究、人間と環境の共生に関する自然科学的研究
- 4) アジアにおけるジェンダーに関する研究

#### [想定する関係者とその期待]

#### 学界

各専門領域における基礎研究、応用研究により、新現象や新しい知見の発見による貢献のみならず、異なる研究領域間の学際的研究による新たな視点からの研究の創設などにより、学界に寄与することが期待されている。

#### 地域社会

奈良という歴史的に重要な土地において、「なら学」などによる奈良の地の価値や重要性の新たな発見や、奈良における女子大学という特別な環境下で、女性研究者の養成と個性的な研究が推進されることが地域社会から期待されている。

# Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定 分析項目 I 研究活動の状況

## 観点 研究活動の状況

## (観点に係る状況)

人間文化研究科では、古代学学術研究センター、アジア・ジェンダー文化学研究センター、教育システム研究開発センター、共生自然科学研究センター等と連携した研究をはじめ、多様な研究分野での研究が行われている。博士前期課程の研究は、後期課程における研究と重なるため、後者の主な研究についてまとめる(資料  $\Pi - I - 1$ )。

## (資料Ⅱ-Ⅰ-1:博士後期課程の主な研究活動)

比較文化学専巧	文 ·	アジア・ジェンダー文化学研究センターや古代学術研究センターと連携して、研究会、国際シンポジウム、都城遺跡調査、中国・韓国研究者による国際学術講演会など実施(別添資料I-1)。理系と融合した環境歴史科学創生分野研究のシンポジウム等を実施(別添資料I-2)。
社会生活環境 学専攻	生活環境 計画学講座	「防犯まちづくり」をテーマとして国内外で調査研究を実施。 お茶の水女子大学との連合大学院設置に向け、生活工学分野の 研究教育を実施。
	人間行動 科学講座	「差異と交感」をテーマとした研究公開シンポジウムの実施 (別添資料 I - 3)。
	社会·地域学 講座	社会学分野と地理学分野が連携して、「ジェンダー」、「生活空間」「高齢者問題」などをキーワードに研究を推進(別添資料 I-4)。日本の少子高齢化社会がはらむ諸問題に関する研究プロジェクトを推進し、アンケート調査などを実施。
	共生社会 生活学講座	「消費者の意識調査」「近畿圏の高齢者と福祉に関する調査」 研究プロジェクトを推進。ロボットと人の共生を考える研究や ジェンダー関連の研究を推進。
共生自然科学専攻		共生科学研究センター主催の国際シンポジウムに協力し、複数の講座にまたがる「ライフサイエンスセミナー」を1・2か月に1回の頻度で毎年実施(別添資料I-5)。日本原子力研究開発機構と細胞の内部構造を高解像度で撮像できる装置の共同開発を推進。古代史に関係するたんぱく質に刻まれた歴史情報を解読する文理融合型プロジェクトで、古代学学術研究センターや奈文研との連携研究を展開(別添資料I-2)。
複合現象科学専	<b>享</b> 攻	数学、物理学、情報科学分野の基礎的応用的研究を推進するとともに、研究交流シンポジウムを毎年開催し、内外の研究者の研究交流を実施(別添資料 I - 6)。

#### 研究活動の実績

学会や研究会での発表、論文出版、著書出版

平成 22 年度から 27 年度において、教員一人当たり年あたり、論文は 1.8 編、著書は 0.4 冊、研究発表は 3.6 回となっており、活発な研究活動を反映している(資料 II-I-2)。

## (資料Ⅱ-I-2:研究業績、論文数、著書数、研究発表数)

教員数は平成27年度5月時点の192名としている。

論文数 (共著を含む)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	53	49	60	58	51	63
理学系	140	176	192	192	146	52
生活環境学系	113	102	139	161	201	165
合 計	306	327	391	411	398	280

## 著書数(共著、編著を含む)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	39	35	57	71	55	38
理学系	9	11	14	10	9	2
生活環境学系	28	19	26	27	38	25
合 計	76	65	97	108	102	65

## 研究発表等 (国内外)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	41	49	76	73	81	67
理学系	328	379	385	380	423	66
生活環境学系	252	274	312	315	321	287
合 計	621	702	773	768	825	420

## 受賞数

受賞者数は年平均7.5件であり、第1期の平均3.3件を大きく上回っている。

## (資料Ⅱ-Ⅰ-3:各年度及び研究分野ごとの受賞件数)

## 第二期

	H22年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	1	0	1	1	1	1
理学系	4	1	0	1	2	1
生活環境学系	5	2	3	6	6	9
合 計	1 0	3	4	8	9	1 1

## 競争的資金

## 科学研究費補助金

申請率(申請件数/教員数)は、全学で 100% を超えており、採択率も年平均 54.4% であり、第一期の 42.1% を大きく上回っている。また、年平均獲得金額は 19,189 万円である(資料 II-I-4)。

## (資料Ⅱ-Ⅰ-4:科研費採択状況(学部兼担教員分を含む))

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
申請件数	222	243	228	271	273	268
採択件数	112	136	145	153	141	132
採択率(%)	50.5	56.0	63.6	56. 5	51.6	49. 2
金額 (万円)	15, 245	20, 471	22, 820	19,850	18, 230	18, 520

#### 科研費以外の外部資金

平成 22 年度 -27 年度の 6 年間の年平均額は 11,880 万円であり、科研費の半分以上の額に上っている(資料 II-I-5)。

# (資料 II − I − 5:外部資金獲得額(科研費以外、委託研究、共同研究、受託研究、寄付金など)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
外部資金合計	12, 231	12, 524	10, 571	12, 133	12, 555	11, 264
(万円)						

## 奈良女子大学人間文化研究科 分析項目 I

## 国内及び国際共同研究

国内外との共同研究も活発で、近畿圏の研究所、大学をはじめ、国内外の大学・研究所など共同研究機関も多岐にわたる(資料  $\Pi-I-6$ )。

#### (資料 II - I - 6:共同研究機関等)

奈良文化財研究所、奈良国立博物館、正倉院、橿原考古学研究所、東京文化財研究所、高 エネルギー加速器研究機構、理化学研究所、総合地球環境学研究所、宇宙航空研究開発機 構、日本原子力研究開発機構、海洋研究開発機構、国立がん研究センター、国立環境研究 所、国立極地研究所、国立環境研究所、

奈良先端大学院大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、立命館大学、関西医科大学、関西 大学、和歌山大学、東京大学、筑波大学、岡山大学、山口大学。

島津製作所、株式会社今西清兵衛商店、サントリー生物有機科学研究所、大同化学工業株式会社、三菱化学科学技術研究センター、ダイワ産業株式会社、

コペンハーゲン大学、スミソニアン宇宙科学研究所、NASA、カールスルーへ研究所、ロンドン大学、ゲッティンゲン大学、ルーベン・カトリック大学、ハノイ大学、アイルランド共和国トリニティーカレッジダブリン、レスター大学、大連理工大学、ガジャマダ大学、内蒙古大学蒙古学学院

#### (水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)第一期と比べると、教員一人年度当たり、研究発表数  $(3 \rightarrow 3.6)$ 、年あたりの科研費採択率  $(42.1\% \rightarrow 54.4\%)$  と増えている。また、共同研究機関との研究も活発に行われている。これらのことから、高度な水準の基礎的・応用的研究が行われ期待される水準を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

## 観点 研究成果の状況

#### (観点に係る状況)

特に卓越した研究成果を以下に記載する。

#### 学術面における成果

中期計画において大学として重点的に取り組む領域としあげた項目 1 ) -4 ) と、それ以外 5 )について記載する。

# 1) 古代学を基盤とした「なら学」の研究

古代学学術研究センターと連携して以下の研究が行われた。日本古代の都城と木簡の研究(業績番号 19)では古代の都城の実態解明を環境・思想的側面から行い、29 編の学術論文からなる書籍を出版し、都城遺跡調査の実施、中国・韓国研究者による国際学術講演会、研究会・シンポジウムを毎年開催し(別添資料 I - 1)、新聞報道などもされ、成果をあげている。また、古代アジアにおける膠生産の研究(業績番号 22)、および考古学資料中の超微量たんぱく質の同定の研究(業績番号 9)においては、タンパク質質量分析の手法を用いて膠の成分であるコラーゲンの原料となった動物種を特定できることを明らかにし、理系と融合した環境歴史科学分野を創生した(別添資料 I - 2)。前者は、「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」の最終評価結果表において、期待以上の成果があったとされる A 評価を受けている。

## 2) 人間の近接環境と生体の調節機能の研究

生活習慣病予防を目指した食品機能成分の作用機構解明の研究(業績番号 5)では、発表論文の一つが掲載雑誌のハイライトに選ばれ、また別の論文は引用数9000回弱となるなど、卓越した成果を上げている。また、共生科学研究センターと協力して定期的にセミナーを開催し(別添資料 I-5)、更に、諸学会のシンポジウムでの発表や種々の招待講演を行った。交感神経活動の循環機能調節に関する研究(業績番号50)では、独自の方法により意識下での多様な臓器の交感神経活動の同時測定を行い、高次神経系の関与を議論可能とした。論文が掲載された雑誌は、インパクトファクター(以下 IF)が 3-6以上で50回以上引用された論文もあり、国際学会での招待講演などに選出されている。

3) 自然科学の基礎的・応用的研究、人間と環境の共生に関する自然科学的研究

<u>ミッションの再定義</u>で、機能強化の理系分野として<u>基礎物理学、分子科学、基礎生物</u>学、高エネルギー物理学が挙げられており、以下の業績がある。

基礎物理学分野:宇宙最大の天体である銀河団の形成進化に関する研究では、X線分光観測の独自な手法により、銀河団が動的な系であることを明らかにした。国際天文学連合から招聘されたレビュー論文や、権威ある学術雑誌へ論文を出版し、プロジェクトを代表して国際会議での招待講演などを行っている(業績番号34)。

<u>分子科学分野</u>:以下の3つの研究では、いずれもIFの高い雑誌に論文が掲載されている。直線状の有機物を鋳型とした多核金属錯体の精密合成を行った研究(業績番号37)の成果は、カバーピクチャーで研究が紹介された。また、希土類金属イオンを基盤とする単分子磁石合成の研究(業績番号38)では、被引用回数が4年間で70を超える論文や、月間アクセス数トップ10に入る論文を出版した。特定金属イオンに対する蛍光センサーの開発の研究(業績番号39)では、有害重金属イオンに対する高選択的蛍光検出剤の合成に成功し、カバーピクチャーで研究紹介され、またイノベーションジャパンなどで取り上げられ、広く世間に知られるようになった。

基礎生物学分野:緑藻ボルボックスのゲノムの研究(業績番号43)は、「単細胞生物から多細胞生物への進化」の視点からの研究であり、その成果は、Scienceへの2編の論文など、IFが高い雑誌に掲載され、また、多くの新聞の科学欄に取り上げられている。クラスリン集合因子CALMの生理学的機能についての研究(業績番号44)は、CALMがアルツハイマー

病のリスク因子であるなど、様々な疾患に対する重要な要因であることを明らかにし、その成果はIFの高い雑誌に掲載され、新聞雑誌でも取り上げられた。動物の成熟後の網膜再生の研究(業績番号46)は、世界ではじめて有尾両生類以外の動物で網膜を全摘出後、再生する事を明らかにし、更に器官培養系での再生メカニズムを明らかにした。国際シンポジウムでの招待講演、海外の学術本の執筆依頼、新聞等での紹介等、成果が評価されている。

高エネルギー物理学分野:高エネルギー加速器機構での実験のデータを解析し、チャームあるいはボトムを含む4クォークからなる新粒子をいくつも発見し(業績番号33、36)、IFの高い雑誌への複数の論文が掲載され、いずれも被引用回数が100-200となっている。4)アジアにおけるジェンダーに関する研究

アジア・ジェンダー文化学研究センターと連携した奈良高等女子師範学校の留学生に関するジェンダー研究(業績番号10)では、帰国留学生へのヒアリング調査等により、留学生教育をジェンダーの視点から調査した。留学生史以外に東アジア交流史等の分野からも注目され、国際シンポジウムでの招待講演などを行っている。ジェンダーの視点に立つ『新しい世界史』の構想と『市民教養』としての構築・発信に関する研究(業績番号12)では、日本で初めてジェンダーの視点から高校世界史教科書を執筆し、雑誌の書評などで各方面の専門家から高く評価されている。

#### 5) 上記以外の研究分野における成果

文学系 日本語活字印刷史の研究(業績番号14)は、漢字と仮名による多様な日本語の書 字活動の活字化をグローバルな視野で解明したものであり、学会誌等で高く評価されてい る。宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究(業績番号17)では、殆ど研究さ れなかった宋代に編纂された総集について研究書や総説を出版し、書評などで高く評価さ れている。否定の2分法に関する研究(業績番号18)では、否定を2分するのは、真理関 数性に基づく2分法ではなく帰属性であることを明らかにした。論文は当該領域の最高の 国際雑誌に掲載され、リポジトリ―引用件数が、2013年以降、1位-12位(100回-1000 回)の月が複数回あり、招待講演も行っている。解釈学的臨床教育学の理論構築と実践(業 績番号29) は、言語構築主義的な教育哲学の立場を原理論的に検討し、臨床教育的なプロ ジェクトを通して実践的に確かめた研究で、著書は関連学会誌の書評等で高く評価され、 また学会のシンポジウムのテーマにも設定されシンポジストとして報告を依頼された。 理学系 数学分野 無限次元リー代数、その量子群および無限次元リー代数の拡張概念であ る W 代数の表現の研究(業績番号30)の成果は、共形場理論等への応用や今後の表現論の 方向性を示す卓越したものであり、日本数学会の2013年度代数学賞を受賞した。情報科学 分野 衛星リモートセンシングによる大気中微量成分の動態解明の研究(業績番号3)は、 人工衛星からの下層オゾンの観測が可能であることを世界で初めて示し、論文は I F が 5 以上の雑誌に掲載され、NASAのNewsletterにも図入りで掲載された。

#### 社会、経済、文化面における成果

文学系分野 「なら学」関連の研究(業績番号 22)において、文理融合した研究体制による新しい歴史学領域を創成した。また、「らくらく農法プロジェクト」(業績番号 26)による様々な地域づくり活動で経済的成果が得られた(別添資料 I-4)。奈良女子高等師範学校の留学生についての研究(業績番号 10)では、本学記念館で公開展示し、過去 5年間で最高の入場者数を記録した。日本語活字印刷史の研究(業績番号 14)では、新聞等に研究成果が紹介され、「嵯峨本フォント(フリー・フォント)」の開発に協力した。ジェンダー言語文化学プロジェクト研究(業績番号 11)では、ジェンダーの入門書が刊行され、テキストや参考書として好評を博した。アルベール・カミュの研究では、国際的に高い評価を受けた(研究業績 16)。

理学系分野 IMSによる土壌由来カビ検出データベースの構築(業績番号2)の成果は 微生物の早期同定という観点から実用化を期待されている。特定金属イオンに対する蛍光

## 奈良女子大学人間文化研究科 分析項目 Ⅱ

センサーの開発の研究(業績番号39)では、基盤技術として重要な高選択的蛍光検出剤の 合成に成功した。また、本学と奈良県の共同開発で、ナラノヤエザクラから酵母分離とそ れを用いた清酒等の製造方法で特許を取得している(業績番号49)。衛星の衛星リモート センシングによる大気中微量成分の動熊解明(業績番号3)においては、下部対流圏オゾ ンの動態を世界で初めて示し、中国から日本への越境汚染の実態を捉え新聞報道された。 生活環境学系分野 生活習慣病予防に関する研究(業績番号5)では、健康な生活のため の食品・栄養に関する優秀な論文としてネスレ栄養科学論文賞を受賞した。アジアにおけ る近代化とリプロダクションの研究(業績番号24)の成果は社会に発信され、出産につい ての成果を医療専門職集団に還元した。不登校の予後の研究(業績番号28)の成果は、文 科省の「不登校に関する調査研究協力者会議」や各都道府県の講演会等で報告された。大 規模災害後の犯罪に関する研究(業績番号25)では、阪神・淡路大震災および東日本大震 災後の犯罪現象について、多くの新聞で報道された。オリンピック開催後の都市・地域変 容を評価・検証する実証研究(業績番号7)に関しては、2020年の東京オリンピック・パ ラリンピックの開催を控え、多くのマスコミから取材、寄稿依頼された。また、ランドス ケープデザイン及び都市デザインに関する設計理論の有効性に関する検証の研究(業績番 号 41) において、国土交通大臣賞や日本造園学会賞等を受賞している。ジェンダーの視点 に立つ新しい世界史の教科書(業績番号12)は高校教師等から評価され、出版後半年で4 刷となった。

#### (水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 学術的研究は、IFの高い欧文誌への論文掲載や、被引用回数の多い論文、招待講演、科研費取得状況などから、期待される水準を上回ると判断される。また、社会、経済、文化面では、マスコミの取材、新聞報道、企業からの訪問、講演依頼、雑誌への掲載状況などから、期待される水準を上回る多様で個性的な研究が行われたと判断される。

# Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目 I 研究活動の状況

第一期と第二期の活動状況を比較すると、論文数や著書数については、実質的にほぼ等しいが、教員一人年度当たりの研究発表数が3から3.6に増加し、年あたりの受賞数が3.3件から7.5に、また、科研費採択率が42.1%から54.4%と12ポイントも増えていることから、質の向上が窺える。

## (2)分析項目Ⅱ 研究成果の状況

- 1. 学術論文や書評、招待講演、IFの高い欧文誌への論文掲載、被引用回数の多い論文、 新聞報道等から判断されるように、以下の分野で顕著な業績があげられ質の向上が窺え る。
  - ・「なら学」関連の古代の都城制等に関する研究
  - 人間の近接環境と生体の調節機能の研究
  - ・ジェンダー関連の研究
  - ・ミッションの再定義における機能強化分野、基礎物理学、分子科学、 基礎生物学、 高エネルギー物理学
- 2. 以下は、第二期に開始された研究である。
  - らくらく農法プロジェクト

地域づくり活動の新規プロジェクトで、高齢農家の柿の葉栽培を奈良県内に定着させる等、経済的成果を上げた。特に、2014年の下市町のプラチナ大賞優秀賞受賞に大きく貢献した。

http://www.platinum-network.jp/about/opinion/#point02

・理系と融合した環境歴史科学分野の創生
理系の技術を古代史の研究に応用した新たか組織

理系の技術を古代史の研究に応用した新たな視点からの研究領域が創生され、成 果が上げられた。